

くらしと教育をつなぐ

2004年2月1日発行（毎月1回1日発行）第12巻第10号（通巻120号）1992年12月15日第三種郵便認可

女と男の家庭科新時代

We

2.3

2004



特集

若者の体験空間をひろげる

【講演録】楠原 彰さん
出会いの真ん中に何を置くか

【インタビュー】二神 能基さん
家族をひらく— 雑居福祉村構想

■連載 スローワークの経済学 竹信三恵子

読んでみませんか? 不登校新聞

www.futoko.org



当事者の声を満載

不登校の子どもの体験談、かつての不登校経験者の今を聞く、親の体験談、相談欄など、不登校新聞には、当事者の声が毎号たくさん掲載されています。また、子どもたちのイラストや文通欄、CD評なども好評です。



各地の情報

各地の居場所や親の会の紹介、その月々のイベントや例会の案内など、全国各地の情報を毎号掲載しています。



論説

さまざまな立場の編集顧問の方が、多様な角度で論説を執筆。編集顧問は下記の方々。

- ・安積遊歩(カウンセラー)
- ・安住磨奈(作家)
- ・内田良子(「子ども相談室・モモの部屋」主宰)
- ・大田 堯(東京大学・日本子どもを守る会名誉会長)
- ・小沢牧子(大学講師)
- ・落合恵子(作家)
- ・熊沢 誠(甲南大学・労使関係論)
- ・芹沢俊介(社会問題評論家)
- ・津田玄児(弁護士)
- ・羽仁 未央(マルチメディア・プロデューサー)
- ・浜田寿美男(花園大学・発達心理学専攻)
- ・ひろさちや(宗教学者)
- ・本多勝一(ジャーナリスト)
- ・山下英三郎(スクールソーシャルワーカー)
- ・若林 実(小児科医)



最新のニュース

不登校を中心に、子どもに関するニュース、事件、裁判、文科省や各自治体の動きなど、最新情報をお伝えしています。また、現在の連載は「孫の不登校」や「不登校と進学」など。そのほか、さまざまな企画を盛り込んでいます。



インタビュー

毎号、さまざまな文化人や著名人にインタビューしています。その一部は単行本にも(『この人が語る不登校』講談社・1500円)。最近では、歌手の加藤登紀子さん、喜納昌吉さん、作家の中山千夏さんなども登場しています。

ご購入のお申し込みは

お近くの郵便局から、購読料をお振り込み下さい。月2回、1日・15日にお届けします。

※ホームページからのお申し込みも可

- 発行回数 月2回
- 体裁 ブランケット版(大判)6P
- 購読料 6カ月4800円
1年間9600円
- 口座番号 00100-6-22077
加入者名 全国不登校新聞社
- お問い合わせ
TEL 03-5360-1231
FAX 03-5360-1232
E-mail tokyo@futoko.org



Non Profit Organization
特定非営利活動法人

全国不登校新聞社

Phone 03-5360-1231(東京編集局)

mail to: tokyo@futoko.org

特集 若者の体験空間をひろげる

【講演録】 楠原 彰さん

出会いの真ん中に何を置くか

(まどめ/稲邑 恭子)

2

【インタビュー】 二神 能基さん

家族をひらく―雑居福祉村構想

(聞き手・まどめ/稲邑 恭子)

13

■女と男の家庭科新時代

新・オホーツクの潮風荒く	江口凡太郎	21
曲がり角の家庭科 第31回 ホリスティック教育の視点から考える「ダイエット」(1)	梶原 公子	22
覚醒＃と＃自立＃のための「ジェンダー論」 一女子大での教育経験から 第5回恋愛中毒を克服する(その2)	沼崎 一郎	27
カトーさんの授業スケッチ “洗脳の実験”の巻	加藤 昭仁	32
食の歳時記 第50回 ほかほか包子	坂本 薫	34

■連載

女が歳をとるとのこと 第80回	木村 栄	36
わがまま映評 第10回 「息子のまなざし」	満田 康子	38
英語で女性問題を語るための ワンポイント・レッスン【番外編10】	吉原 令子	40
乱読大魔王日記 第50回	冠野 文	42
過去を振り返らない/先を考えない 第39回 いろんな生き方を教えてもらって	松本 一郎	44
日本一のNPOを目指して 第10回 離婚家庭の子どもの気持ち 2	新川てるえ	46
妻が変われば夫も変わる 第8回 家事労働	三浦 純子	48
こだわらない、にこだわって 第10回 姉と妹、この複雑な関係	二見れい子	50
スローワークの経済学 (最終回) 効率という名の非効率を乗り越える	竹信三恵子	52

- 著者による本の紹介 まつぼら (91) 58
- 読者のひろば 61
- 編集後記 64

出会いの真ん中に何を置くか

まとめ／稲岳恭子

96年4月号にもインタビュー記事を掲載させていただいた楠原彰さん。こんな先生の授業を受けられる学生はラッキー、といつも思う。アフリカやアジアへの旅を続け、反アパルトヘイト運動に関わるなかで、黒人意識運動の創始者スティーヴ・ビコの「君は君のままでいいんだよ」というメッセージに出会って、自分と自分たちの出自や経験に居直って生きるしかない気づかされたという楠原さん。同化や教育というものは恐ろしい、いまのあるがままの自分を決して許さない、自分自身であることを恥じさせ、限りなく自分を自分以外のものに変えさせようとし、最後には自分以外の人や物（多くの場合、自分を抑圧する人やシステム）に依存しないと生きられない存在にってしまう、と。



楠原 彰さん

(くすはら・あきら)

1938年新潟生まれ。現在、國學院大学教授。専攻は教育学。1964年頃から反アパルトヘイト運動を始める。著書に、『アフリカは遠いか』（すずさわ書店）、『自立と共存』、『アフリカの飢えとアパルトヘイト』、『アパルトヘイトと日本』、『南と北の子どもたち』（いずれも亜紀書房）、『世界と出会う子ども・若者たち』（国土社）、『セカイをよこせ！子ども・若者ととに』（太郎次郎社）ほか。

なお今回のお話は「関係性の教育学」学会（The Engaged Pedagogy Association/略称EPA）の勉強会でファシリテータとして参加された楠原さんのお話をまとめたものです（2003年11月30日、於：東京ウィメンズプラザ会議室）。記録をまとめ掲載することをご快諾いただいた「関係性の教育学」学会と及び世話人の吉原令子さんに感謝いたします。「関係性の教育学」学会及び勉強会等についてのお問い合わせは、E-mail:rei0225@m17.alpha-net.ne.jp（吉原令子）まで。

●「学びたい」という欲求の衰弱

学生たちを見ていて、「アレック？変だぞ」と考えだしたのが、七〇年代の終わりぐらいのことです。「経験と言える経験がない」「自由があると怖いから、ある程度管理されたほうがいい」「他人が馬鹿に見えてしょうがない」「他者が追ってこない」「自分以外になんの関心もない」……そういう言葉を実際に学生たちから聞くようになるのが七〇年代の終わりから八〇年代にかけて、高度経済成長の流れが最終段階に達してやがてバブルに入っていくころのことです。その直前に中曽根が出てきて、教育も全部市場経済の論理でという新自由主義が始まっています。そういう中で、子どもたちが直接的・人間的関係を奪われて、遊びからセックスから人間にとって非常に重要なすべてのものが商品経済の中に巻き込まれていくわけです。その過程で何が起きていくかというと、ワイルドで人間的な成熟というか、社会的・市民的な人間的な成熟がとつても難しくなりました。当然、そこから「学びたい」という欲求が衰弱してしまいます。いま文部科学省が、子どもたちの低学力が最大の問題だから「ゆとり」教育を見直そうという、学力論の人たちから巻き返しを受

けていますが、学力論の人たちと私の考えが根底的に違うのは、学力が下がっていることが問題なのではなくて、「学びたい」という欲求が衰退していることだけが問題だと思っていることなんです。

学力なんて、「学びたい」という欲求があつたらすぐ追いつきますから。何かの出会いがあると、学生たちが突然勉強したいと目覚める時があります。英語なんて見る間に上手くなっていきますよね。下手だけど、自分の主張を絶対伝えるようになりますから。

「学びたい」という欲求というのは、社会的・市民的成熟と一緒です。つまり、誰と出会うか、どういうモノやコトと出会っていくか、ということですが「学びたい」欲求は生まれません。どこの大学に入るかということでしたら学力は身につかない。二葉亭四迷も百年以上も前に言っています、こういう学力は人間を幸せにする学力ではない、競争の学力で、世の中を変えたりする力にはならないと思っています。

子どもたちから奪われている関係性

学校と学校化された社会。あらゆる場面での競争。学校や塾や家庭での序列化のための学力の強制。生活

においても学びにおいても主体的参加を奪われて、学びから逃走する若者たち。

なぜそうなったかというについては、割合大勢の人が批判したり分析したりしていますが、ではそれをどう解決するのかというのは、人はあまり言えません。

なんでそうなったかという原因探しや分析は、パウロ・フレイレやミッシェル・フーコーなど、いろんな人の本を読みながら言葉をつなげていくと、そんなに難しい問題じゃない。関係性、経験を奪われたから、他者とか世界、命、モノとかコトとの直接的相互的關係性が奪われてきたからなんです。

子どもが大人になっていく時に何が必要かということを考えていくと、必要なものはそんなにいっぱいあるわけではない。「生きていていいよ」というまなざしでいつも受け入れてくれる誰かがいるとか、自分の社会的役割が見つかっていくとか、それから神、精霊、天といった人間を超えた恐ろしいものの存在があるということをきちんと教えてもらったり、死、生命、誕生という人間の極限状況というものとかどこかできちっと出会っていくとか。そういうなかで、「よし、生きていくぞ」ということになるんですね。

あげればきりがないけど、他者、モノ、コトとの一方的な関係じゃなくて、働きかけたら働きかけられるという相互的な関係性が、遊び、仕事、学び、家族、学校……あらゆる所で少しずつ子どもたちから奪われていつていると感じます。

学びから逃走するというのは、非社会、非知性です。反社会ならばまだ僕は「頑張れよ」と言えますけれど、非社会となりますと、社会的関係性を拒否する、深い関係を拒否するわけですから、こちらとしてはどのように出会っていいのかわからない。それから反知性なら、知性に対する反発で別のアンチテーゼで対処しますが、非知性となりますと……。

今、高等学校も大学も、だいたいこういう状況だと思っています。その原因は暮らしのシステムの問題と関係している。このようなことはミッシェル・フーコーは「調教」と呼ぶし、パウロ・フレイレは「飼育」と呼ぶし、イヴァン・イリイチは「教育は全世界を幼児化する」という言い方をします。つまり自分でものを考えなくしてしまう。こういうことの詳細な分析をしているブルデューなんかを読めばわかる。

●では、どう解決するのか

僕は自分でも学者じゃない、理論家じゃないなどというがよくわかるんですが、それは、どうなっているかということにはあんまり興味がないんですね。それはちょっと勉強すればわかるじゃないかと。でも、どうするかというのには勉強したくらいじゃできないと。これはイリイチやフレイレをいくら読んでもできないですね。

僕の娘は、神様が良くしたもので、あまり勉強の好きな子どもではなかった。学校や学校化社会からはみでるようになった。夜中の二時ぐらゐまで近くの広場で二〇人ほどの友達と遊んでいて帰って来ないようなことがよくあった。しようがないから、そこへ「おじさん、また来たの」なんて言われながら行くわけです。これはほんとに切ないですよ。それで皆言うんですよ、「ともこ、いいな。お前んちの親父だけだよ、こんな所に来るのは」。みんな来てもらいたいんだよ。団地の広場で集まっているとすぐ警察に通報だからね、誰も来やしない。僕はたまたま娘がいたからね、「帰ろうよ」と行くと、「ま、座りなさい」と言われる。いい話をしているんですよ。シンナーを吸った子に対し

て皆が糾弾している。「何してもいいからそれだけはやめろ、ボロボロになるぞ」って。僕はあの時に開眼しましたよ。今の市民社会で一人の子どもがシンナーを吸って体をボロボロにしようとしている時に、誰が本気になって夜中の二時三時まで起きて、やめろなんて言うか、同じはみ出し仲間だけじゃないかと。この子たち離れられないよなって、そう思いました。

でも僕は、やっぱりみつともないよって、夜中に団地の中をバイクで走ったりしている連中に向かって「どうせバイクに乗るなら、北海道とかアフリカのサバンナなんかに行って行ってあげるからさ」なんて言ったりしてたんだけど。でも、一人でサバンナにバイクを持って行って走れるようだったら、あんなところをつるんでないですよ。

というわけで、子どもたちが「なぜそうなるか」よりも、「では、どうするか」という方を一生懸命やっている人に拍手を送りますね。これは自分が学問的にだめだということの言い訳ではないんですよ。

娘は三〇歳を過ぎましたが、高校を終えて家族から離れた時、元氣になりました。仲間からも家族からも離れてニュージーランドの各種学校に入って、そこに二年くらいいて、あの時間は大事だったと思いました。

すべて一人でやらなければならない時間。親つていうのは子どもにとっては邪魔なんだというのがよく分かりました。遠くにいた方が子どもはいい、親もいいんですね。両方がものすごい愛を感じるわけです。ほんのちよつとお金を送つても、ものすごくありがとうと言われる、普段は当然のような顔をしているんですが。

●学生の経験・文化から学ぼうとする姿勢

大学の問題を言いたい。大学生がどうして学びたい欲求を奪われているかということと関係するんですけど、僕が気がついたことを九つくらいあげます。

まず一番目。学生は何も知らない、無知、無経験であり、無文化のように扱い、彼らの経てきた固有の経験や文化や考え方から学ぼうとせず、自分の職業上の立場と学問上の権威を混同して威張り散らすんです。大学の先生は、これが学生たちを駄目にしていきます。

まず目の前にいる学生が子どもだと思っています。白紙だと思っています。とんでもない、教師より遥にしんどい経験している学生がいっぱいいるということが僕にも分かってきました。中学校二年生の時の家族団欒の時に父親が一番大事な母親を刺し殺すという現

場にいあわせた学生を僕は知っています。家族は解体して、母親は死に、父親は刑務所に、きょうだいばらばらに親戚に預けられ、彼女は大学に來ました。それを僕のコメントペーパーに少うしずつ毎回書いてくれた。最初はなんだか分からなかったけれど、学期が終わったら物語が完結していた。このとき僕は抱きしめてやりたい、本当によく生きてきたと思いました。そういう学生がいるですよ。

そういう学生が、「君たちフランス語できないんですよ、学力ないですよ」なんて言う教師の態度にどれほど傷つくか。まず大学の教師はこのところが出来ない。特に語学の教師はなぜか学生一人ひとりの固有の経験なんかにはあまり関心を持たない。教師は小学校から大学まで同じですね。先生の立場つてありますよね、学問的権威なんて何にもないんですけど、それと混同するんです。おれは偉いんだと。これは分かってもらえない。僕も時々駄目です、権威と混同します。

●教室で一番重要なのは隣の生徒との関係

二番目は教員の一方的おしゃべり。一人一人固有の

試験を持ち、さまざまな考え方を持っている学生たちが授業に参加できない。教員を批判する制度が保証されていない。

私は一方的なおしゃべりをしないようにいろいろやっています。毎回授業が終わりますと、コメントペーパーを書いてもらいます。そして僕を批判するコメント、非常に右翼的なコメント、問題を抱えているコメントとか、ぼくが勝手に選んで一人分くらい印刷して次の時間に配ります。そうすると、皆、一所懸命読んでいますよ。最初に先週の幾つかのコメントをめぐって議論します。

ここで一番大事なのは、授業というのは教師と生徒の関係だけじゃない、授業というのは隣の学生同士の関係が最も重要だということが分かったんです。隣が何を考えているのかというのものはものすごく刺激になるんですね。これを三回、四回続けると、共通して言うのは「あ、皆馬鹿じゃない、皆考えている」。この発見が学びの場を非常に温かくなりますね。僕もそう思います。答案だけだと教員の僕は分かりませんが、他の人は分からない。この方法だと、全体が参加しているという感じがする。ですから、これはとってもいい方法だと思えます。隣にいる人が何を考えているかよ

く分かる。

「楠原は確かに左寄りだけれど、僕とは決定的に合わないかもしれないけれど、僕がこういつて意見を述べる場を与えてくれる、話を聞いてくれる。中学校高校時代、教師とよく衝突した。でも多くの教師たちは一方的に僕の意見を否定するだけで、一方的にしゃべりまくって、まるで話をさせてくれなかった。自由に討論ができるようであれば、先生のいうとおり、右も左も関係ないかもしれない」。これを書いてきた学生は、相当な確信右翼で毎回すごいことを書くんですよ。「アジアの解放のために戦って死んだ祖父たちを敬え」とか、「祖父たちの歴史を汚すな」とか。

「自分は親から一銭も貰っていない」と書いてくる学生がいます。新聞配達をして働きながら大学に来ていて。そういう学生のコメントは、隣の学生たちにとってもいい刺激を与える。韓国の留学生なんかは、「私は徴兵制を経て来てここにいます」と書くとおお、苦労しているんだと。そういうことはとても大事だと思えます。一人一人固有の経験を持っているということがよく分かります。

●職員との出会いを保障するシステム

三番目は教職員との出会い。特に職員との出会いを保証するシステムを大学は考えないと駄目だなと思っています。しかし、教員とは出会いますけど、向き合うことを保証されていない。つまり教員と一緒に学んでいる友人との相互的なコミュニケーションの機会を保証されていない。相互信頼が存在しない教室は非常に冷たい。だから私語が生まれてくる。学生同士の出会いをつくる、そこに職員もたまに入ってきてもらおう。そういう出会いを日常の職場で作っていくというのが大学では必要だと思えます。

●学びのインセンティブをどうするのか

四番目は、同時代の課題、飢え、戦争とか、学習者の学びのインセンティブ、こういったものがほとんど考慮されない教育内容。

必ずしも考慮しない教育内容が駄目だとは断言しません。相当の学力がないと源氏物語の同時代解釈というのほどこないわけですから、まず古い解釈を学生たちに伝えなきゃならない。そうでなかったら、古語を

読める学生がいなくなってしまうので、古文の読み方なんかは教えますけど、そういうところで学びのインセンティブをどうするのかというのは、なかなか難しい。ここの所を教師たちは錯覚するんですね。皆自分と同じような文法学者とか源氏物語の研究者になると思っている。つまり、皆自分に似せてつくりたい。

みんな学者になるわけではなく、つまり普通の市民になっていく学生たちに、学びの動機付けをどうするか。僕自身もスタディツアーをやったり、いろいろなことをやっています。ゲストを呼んで来たりするのも一つの方法です。同性愛者が来たり、被差別部落のおじさんが来たり、在日の人が来たり、精神障害者差別と闘っている人が来て下さったり、来週は『性を買う男』（現代書館）を書いた谷口和憲さんが来てくれます。自分の買春体験を公表し慰安婦問題をやり始め、今は「男の性」の問題と取り組んでいる。学生の中には買春や売春の体験を持っている人たちがいたり、性の問題で苦しんでいる人がいたりする。そういう学生たちは、谷口さんみたいに自分の性をあつけらかんとさだけだしてくれる人が来たりすると出てくるんですね。性の問題はすごく学生たちは学びたがっている。

●見えない隣人としてのマイノリティ

五番目にはフィールドワークや、当事者、社会的マイノリティなどが全く考慮されていない授業が圧倒的だということ。それをやろうとしたら自腹を切らなければならぬ。これがきついです。大学でも総合講座などでは四人くらいゲストが呼べるようになっていくけど、それじゃ足りない。一万五千円では遠くから呼べないんです。どこかよそで嫌な講演を黙って引き受けて講演料をプールしておいてやっています。京都大学方式と言うんですけど、京都大学がなぜアフリカの猿や人類学の研究があれだけ優勢になったかという、今西錦司や先輩たちが、あちこちで原稿料とか講演料を稼いで銀行に口座をつくってそこに皆で振り込んで貯めて、大学院生をアフリカにどんどん送り込んだ。あれはすごかったですね。その金で猿や人類学の研究が途切れることがなかったわけです。今は物凄い額の援助が出るようになりました。僕たちはそれは違いますけれども、似たようなことをやっています。それからぼくが一番いい学びだと思ったのは、文部科学省が総合学習に対応して教員養成の大学で半期間の総合演習というのを義務付けたんです。文科省はそ

れを三五人以下のゼミ形式を求めた。うちの大学はそんなことはやりたくないんですが、文科省には弱いんでやっている。これだけが僕の持っている唯一のゼミなんです。半期のゼミ。しめた!と思って、僕は「見えない隣人としてのマイノリティ」というゼミを持っています。毎回三〇〇人くらい来てくれるんですけど、その時に約束したんですね。「あなたが日本でのマイノリティ問題だと思っているものを一つ選んで、それを報告して欲しい。その方法として、当事者と出会ってほしい。文献だけを使った報告にしないで下さい」と。皆、初めは当事者との出会いのことを考えないでホームレスとかアイヌとか選んでいましたけれど。本当によくやりました。ホームレスと出会う女子学生がインタビュールしなきゃならなくて、最初はずかしがつてホームレスのそばに行っては帰ってきて、公園のベンチに座っていればホームレスの人が話し掛けてこなくなるとか言いながら、そういう話がとつても面白い。結局はあるNGOのホームレスへの給食ボランティアに関わって、ホームレスとの出会いに成功するのですが、アイヌは東京のアイヌを紹介してあげました。そしたら最後に夏休みに北海道の二風谷まで出かけて行って、すごいレポートを書いてきた。

素晴らしいですね、当事者と会うというのは。「もう来るな」と言われたり、「俺はお前の調査の対象じゃねえんだ」と言われたり。当然ですよ、そんなこと言われるのは。当事者との信頼関係をつくることから学びがはじまるわけです。障害者と会う学生は、ボランティアに行つて関係作つてインタビュウさせてもらっています。とってもいいインタビュウでしたよ。東京で、文献じゃなくて、部落の人と出会いながら論文を書くのは非常に難しいので、ある県の部落解放運動に関わっている人を紹介しました。よほど信頼されたのでしよう。その人が、県内の部落を案内してくれて、あとは一人でやりなさいとサポートしてくださった。これも本当にいいレポートです。同性愛者のレポートを書いた学生は、ゲストとして来た同性愛者の話を聞いたりしながら、彼は自分が同性愛者であることをこの過程で話すんですけど、自分のことをあつげらんと書いています。高校生の時の悶々としたこと、大学で友人たちが女の冗談言っている時に自分だけ言えないんですね、何の関心もないから。ゲイがマスコミヤ世間で笑いの対象にされる、それを苦々しく書いています。

当事者と出会う、これは学びにとっては本当に大切

なことですね。大学はこれが一番できないところ。

●身体や物を存分に使う

それから六番目ですが、大学は身体や物を存分に使つて授業をする場所がほとんど作られていない。僕は毎年学校と喧嘩していますけれど、寝転べるフロアースペースがないんです、だから、机を取つ払つてワークシヨップをやらなきゃならない。近くのでっかい神社の境内を使っていたら、宮司がやってきて、私有財産だからお金を払ってくださいと、使用料を5千円取られました。神社の境内すら、もうパブリックの場合じゃないですよ。そこに神道学科の生徒がいましたから、よく見ろ、日本の神道が民衆の祈りからどれだけ離れてしまったか、民衆の信仰は考えていない、なんて言っちゃってね。

●時間を生きる

七番目は、教師がその時間をまず生きるということが大事だということ。フレイレも若い頃書いています。なぜ私が識字に入つて行つたかという、私は中産階

級の出身だったから飢えて死ぬことはなかったけれど、友人たちは食べられなかった。そのとき、自分だけが食べられて友人たちが食べられないというのはどういうことなのか、自分だけが読み書きができて他の人が出来ないということは何なんだ、というところから、自分が自由になるといえるのは何なのだろう。自分が自由になることと他人が自由になることは一緒なんだと。だから自分は識字の実践をやり始めた。

これを別の表現で言えば、「自分が今の時間を学生と一緒に生きたいから、学生も一緒に生きようよ」というのが教師の学生との学びあい、インセンティブじゃないでしょうかね、ティーチングの。

僕がいつも思うのは、今、この時間がいいとおしいということ。時々学生がしらーっとしらけていて、今日は止めたい、帰りたいと思うときがしばしばあります。そんな時ぼーっとしていると、ああこの時間いいとおしいぞ、この関係はいいとおしい、どうしたらどつちにも大事な時間にできるんだろうか、よし今日は止めよう、机を教室からみんな出そうと言って、ワークシヨップをやるんです。でもワークシヨップが嫌いな人もいます。嫌いな人はやらなくていいと言っただけですが。たぶん管理の別の形態に見えたんだと思うんですね。

集団行動で手をつなぎましょうとかね。それは僕はとつても分かります。ワークシヨップというのは嫌いな人は参加しないということがとっても大事だと思っています。

●剥き出しの命と向き合う

最後に「剥き出しの命」とちよつと大げさに書きましたけれど、剥き出しの生、剥き出しの現実世界、こういうったものと集団で向き合つて学びあう機会。

つまり、僕は大学の中に（非日常）を入れなければ駄目だと言う気がします。例えば、日本の日常生活では、いのちの問題と直接向き合うことはあまりない。日本の日常では、自分の命は自分で守ろうという気は全然しなくて、非日常ですから、自分で自分の命を守らないと誰も守ってくれないというのがよく分かる。そういうのと似たものを、年に一度でいいから、クラスだけあるいはゼミだけでもいいから、大学の中に保証しなきゃならない。

剥き出しの生なんていうとどきつとしますけど、例えば、新入生のガイダンスなんてのは止めてクラスごと

とに助け合って山手線沿線を夜中に歩くとか。馬鹿みたいですけど、意外と一遍でその大学を好きになるんですね。非日常、エロスの発散できるような、祭りのような、そういうものがないと愛校心なんて生まれません。僕は愛校心はどうでもいいんですけど、隣人が好きだ、一緒に学ぶ奴が好きだという経験を作りたい。これは同じ釜の飯を食うことがまずは大事。弱い奴を助けて歩くとか障害者をおんぶして歩くというようなもの。スタディツアーはまさしくそうですね。こういう関係においてはクラス会なんかを遥に越えますね。特に、生と死が剥き出しのまま交錯しているインドへのスタディツアーは強烈です。

● 出合いの真ん中に介在するものの力

学生はチャンスさえあればいくらでも勉強したがっている。でもそのチャンスを保証する場がない、先生がない。

出合いというのは人間と人間が出会おうわけですけど、真ん中に何が介在するかということが決定的に大事です。スタディツアーでは、したたかに介在するものが人間と人間の体を柔らかくしてくれる。〈自分の

悲しみを中心に世界は動いていないんだ〉ということを知らしめてくれるものが、大学の教室や日本の地域社会よりはあります。

インドはちよつと歩けば死があったり、スラムに行くとおばあちゃんが死んでいたり、学生たちは誰も何も言いませんけれど、皆どこかで泣いているんですね。それを何人かで共有する。死んでいく人間たちと出合いながら大事なものを貰ってくる。真ん中に重度の障害者が一人入るとか、インドの貧困が入るとか、すごいテーマを持つている介在物を通じて出会うと、人間関係というのはすごくいい出合いになるんですね。だからインドでは、新宿で出会うのとは違って、世界が抱えている問題を共有しあえる仲間になるんですね。

総合学習でもそうだと思う。真ん中に置かれるもの（学びと出合いの対象）が人間を繋いでしまう、人間を変えていく。学生に言っているんですよ。「真ん中に何を置かかが大事だぞ、それを考えないと軽薄な仲良しグループになってしまうよ」と。文学とか、詩をかくとか、とてつもない発光体がいるんな所にあるじゃないですか。例えばマイノリティは、そういう面ですごくいい力を持っていますよね。

■特集 若者の体験空間をひろげる

□インタビュー（聞き手／まとめ・稲邑 恭子）

家族をひらく

——雑居福祉村構想

二神 能基さん

（NPO法人ニースタート事務局）

千葉県で引きこもりの若者支援をしているNPO法人ニースタート事務局の試みについては、本誌で何度か紹介しているが、久しぶりにサポーター会議に出かけたところ、またもや目新しいキーワードが飛び交うレジュメを目にして驚いた。これは何が始まるのかと関心がわき、改めて代表の二神能基さんを訪ね、今後の展望についてお話を聞いた。（稲邑）

●家族をひらく

稲邑 「家庭と仕事の時間差両立」とありますが、これはどういうことですか？

二神 核家族という単位で考えると、家庭と仕事の同時両立は無理ですよ。一生の間の時間差両立で考えるしかない。つまり、子どもが小さい間は子育てを中心に、大きくなったらすつと仕事に復帰できるようなシステムをニースタート内部でつくる必要がある。

稲邑 でも、子育てをサポートしてくれる「大家族」があれば仕事を続けたままでOKということもありますよね。

二神 そうですね、〈家族をひらく〉という、イタリアで宮川秀之さんたちのやった運動がキイになるでしょう。子どもを育てるには二人の親では足りないんです。〈家族自立主義〉の呪縛からの解放が必要です。**稲邑** 核家族は封建的な大家族から逃れて近代的で進んでいる、という幻想があったのに、皮肉ですね。

二神 ずっと大家族で行け、と言っているのではない。シエルターのような感じで、大家族を一時的に使えばいいんじゃないですかということなんです。つま

り（一時的で緩やかな大家族）というのがキイ。今、市川市の行徳で、八十人くらいのおんな大家族でやってみています。雑居福祉村です。面白いですよ。

稲邑 そういえば、ちょうど二年前に四家族で「子育て長屋」をはじめましたよね。

二神 子育て長屋はうまくいかない。

稲邑 それはなぜ？

二神 まず、長屋の構成員が同世代同士だった。日本人の同世代のお母さんたちは「核家族でガードして」という部分がタイトで、うまく協力しあえないんです。コロンビア人のお母さんが一人入ってから空気が変わり、少し可能性が出てきたんですが、今度は彼女に一人しわよせが来るといふ不都合が生じた。彼女は他人の子どもをしょっちゅう預かるが、日本人のお母さんたちはなかなか預からないとか、ね。

これは、「雑居福祉村」の中に子育て長屋があることでようやく子育ての支えあいも機能するのではないかと気づいてね。つまり、外国人のお母さんが入るとか、全体を見てサポートできるおばあちゃん世代の人が入るとか、「日本の核家族」以外の要素が入らなないとだめなんです。

稲邑 まだ私たちくらいの世代の子育ての時期は長

屋的共同体の尾ひれが残っていたのですが、今の若い世代は中産階級というか、閉じたまま互いに距離をとる文化が身につけているから（家族をひらく）というのは難しいのではないですか？

二神 コミュニケーションがうまくとれない。きのう若者がカラオケに行くというのでつきあったのだけ。カラオケというのも不思議なもので、全体の空気はなんとなく盛り上がっているが、それぞれが全然他人の歌を聞いていない。ひとりずつ引きこもっている。カラオケがはやる理由がなんとなく分かりましたよ。引きこもったままでみんな盛りがっている雰囲気がある。あれは悲惨な装置やな、パチンコ屋と同じやなど。田舎に行くと夜に人が集まっているのはパチンコ屋だけ。真つ暗な街にそこ一カ所だけ煌々と電気がこもり、おそろしいな、日本はものすごい引きこもり社会だと思いましたね。

●仕事を体験できる場所を

稲邑 「ワークトライアル10」というのは？

二神 うちの内部で仕事体験塾は時給が安いので、外でバイトしたいと言う子が出てくる、それで、いい

よ、と外に出すと、半年も続かない。というのは、消耗品のな仕事しかさせないんです。それで、こんなことを続けていても自分の未来につながらないということにすぐ気づくので、結局、「意味ないのでバイトやめます」と。「引きこもりの子はバイトでもしたら自立」とよく言うが、昔は社長が若者を見てくれるとかいうのがあったが、今は、若者を消耗品としてしか使わない。

稲邑 それは技能もつけてくれないし、人間的な交流もない、育てる要素がなくなった、と？

二神 ただ単にお金を貰うためにこなす仕事というのは若い子には時間の無駄遣いだと思っていて、そんなバイトならやるな、と言っている。それで、もうちよつと人生とかいろんなものを考えられるような仕事場があるんやな、ということで、鹿児島島の堂園病院のホスピスに送り込んでいます。一週間研修に四、五人、もうちよつとじつくりやりたい人は三ヵ月研修。病院のなかに泊めてもらっているの、こちらから月一五万円くらい払っています。板橋にあるイクトスという知的障害者の施設、昨年四月にできたばかりの施設なんです、申橋という理事長が大学時代の友人で、そこにも頼んでいます。ここは埼玉県志木市にある二

ユースタートの寮から通うので五万円くらいですが、「おまえたちの勉強なのだからこちらから払う。いっぱい勉強してこい」と送り出します。三番目が新座市の釜屋という名門のうどん屋、四番目が日光の金谷ホテルベーカーリー。来年中に多分、ワークトライアルも十カ所くらいできるでしょう。

稲邑 こういうふうの一つ一つあたって、信用できるところに送り込むんですね。

二神 現場でいろんなことを考える、教室なんかとは違う生きた学びなので、今の若者にとって大事。堂園さんも申橋君も理想を大事にする人ですから、そういう職場があることが大事ですね。

稲邑 引きこもりの三点セットから四点セットへの転換として、二〇〇五年度の課題として「マイペースで仕事を追いかけてながら世の中をよくする仕事場」をつくとありますが、これはむずかしくないですか？

二神 いや、それはいくらでもつくれますよ。昨日も、うちを卒業して立派に働いている連中が七人ほど集まるといって行ってきたのですが、確かにバリバリ一人前に働いているが、ずーっと死ぬまでこれ続けるかと思うと考えてしまう、と言う。コンピュータ系はこきつかわれているし、それはきついですよ、僕

も酔っ払って来たんで、「三年後くらいにはお前らみんな戻れ」と。「外に研修に出したつもりでいるから、そこで磨いた技能をニュースタートで生かせるようにそこらへんの展望を考えながら仕事しろ」というふうに檄を飛ばしてきたんですが。

稲邑 確かに起業することはできますよね。

二神 そうなんです。最終的にはニュースタートは世界八十八ヶ所構想だから、八十八人のリーダーがいるんだと。だからお前らが戻ってきてやってくれるのは非常に望ましいと。うちの内部だけで育つとどうしても狭くなるので、みな、外に一度は出ないとだめだ、ということを行っている。外に出たり戻ったりというのもスローワーク的なやりかたです。

●パラサイト自営業のすすめ

稲邑 「とりあえず〈パラサイト自営業〉をめざせ」とありますが、これは何のことですか？

二神 郷里に帰り、親の財産と労力をこき使って地域事業を起こせということなんです。高齢者向けのデイサービスなど簡単に開ける。両親も六〇歳そこそこで元氣ですから、恵まれた世代の親をまきこんで、親

の持てるものを元手にはじめると。高齢化社会になると介護関係の小さなデイサービスとかグループホームとか、ビジネスチャンスはいっぱいあります。とりあえずほとんど、ホームヘルパー二級の資格は取らせますから、あとは社会福祉士の資格を取れるとか、階段式にいけるし、うちでやったことが実務体験にはなるし。本人がデイサービスのセンター長の資格を取ると、親父を運転手にして家族はそれで再生するのだと。ちようど親の退職期にかかるので、親の第二の人生もお前たちがつくってやれと言っているんです。最近は、家族ごとニュースタートに来るケースも出てきています。親御さんは優秀な方が多いので、こちらで宿舍を提供して働いてもらい、日本銀行券のやりとりはなしで、三年位ノウハウを学んでもらって、ご自宅に戻り、郷里で施設を開いてもらう。そこにうちの若者をつけて行かせる、ということも考えている。

稲邑 それで小さい施設はできますよね。

二神 大型の施設を行政がつくる時代は終わってますからね。いくらでもチャンスはある。引きこもりの若者を見ていると、どこか学校や株式会社に向かない要素を持っている。彼らを元に戻すと、彼らも不幸だけど、戻されたほうも困ると。いまの若者はパラサイ

トせざるを得ない社会構造があるんです、経済的に展望が明るくないですから。僕らの世代は実力以上に過剰にいい目にあつてますね。それなら徹底的にパラサイトで行けど。「パラサイト自営業」というと、若者はいやそうな顔してますが、まず家族が閉じていますから、家族内が一番手つ取り早くお金が流れやすい。

稲邑 五〇%の自立、五〇%の相互パラサイトが基本的なパターンだと。

二神 ほんと、基本的に日本人は自立できない民族です。親に会うとき「最終的に自宅の息子は七〇%の自立三〇%のパラサイトが限界」だとはつきり言うようにしている。この子に一〇〇%の自立を迫ると追いつめることになりますよと。だいたい、日本の若者の半分は自立なんて無理です。

稲邑 一〇〇%の自立が可能だという幻想が苦しめるということがありますよね。

二神 若者は自立を強迫されとるんですよ、そこをほぐしてやらないと。うちには自立自立と念仏のように唱えて空転しているやつがいっぱいいるので。

稲邑 だから引きこもりになるんですよ。

二神 自立か依存か、オール・オア・ナッシングになりますから。自立する時ともたれあう時と適当に使

い分けて生きていければいいのです。

●スローワークは参勤交代

稲邑 MRの多様化を推進するとありますが、このMRって何のことですか？

二神 ミーティングルームの略称で集団生活の寮のことです。いろんな場所が必要ですよ。韓国やマニラなどいろいろつくってきたけど、もっと外国にもほしいし、国内も銀座MRのようなものもあるし、自然のなかの屋久島MRもつくりたい。世界に八十八カ所のMRを作る計画です。一人の人間の中でもこの時期はこの場、そのうちまた別の場のほうがよくなるとか、変わっていくでしょ。スローワークは、八カ月船橋に行つて、四カ月ロタ島でのんびりするとかね、参勤交代みたいなのを含まないとしんどくなります。

稲邑 ロタ島って？

二神 サイパンとグアムの間にあります。アメリカから半分独立した自治区なんです。ロタ政府の日本代表の人が来て、ロタ政府から土地を貸してもらっている、そのまわりにお年よを集めるようなものをつくりたいのでその立ち上げをやつてほしい、と。

あそこは屋根さえ作れば寝泊りできるので。ものすごく疲れているやつは、ああいうところでは一とすこす時間が必要です。行徳あたりにいるとしんどい。何かせないかん、みたいな気もちになるので。リフレッシェを考えると、スローワークにならないね。

稲邑 ゲリラMRって何ですか？

二神 世界の危険地域にゲリラ的につくる。日本には、イラクあたりに行かさんと目の覚めん若者がいっぱいいる。

稲邑 危険に直面させる？

二神 それではじめて生きるということが感じられる。マニラに行かせると言うと「そんな危険なところに」と親は言うが、親に「お宅の息子さんにすれば日本が一番危険」という話をするが、わからないみたいですね。こんな安全な国はない。物が豊富にある。便利にできているので、いとも簡単にやっつけていけるから、生きるという実感が感じられない。いまの日本は子どもや若者を育てるのには最悪の環境です。外国はただ行かせるだけで効き目がある。それから、外国では周りからのアプローチがものすごくあるんです。マニラMRもフィリピンのNPOからの働きかけがあつて、日比合同のNPOができた。それで、自動的にビザが

出るようになった。韓国でもローマでも、いろんなところから働きかけがあつて、こんなことしたらどうかとか言ってくる。日本では「うまくここを利用してやるう」とかいうのはあるが、一緒に何かやるうという空気はなく警戒的です。外国は展望がなくMRをつくっても、最終的にはちゃんと展望があつてつくったような状況になる。そういう意味では、日本の行徳が一番周りが冷たいです。外国はコミュニケーションがあるんですね。日本人はみんなが、ひとりごとを言っているみたいに自分で一方的に決めてくる。社会全体が引きこもっています。

●雑居福祉村のオープン

稲邑 二月に船橋の駅前の高齢者住宅と保育園がオープンすることですが。

二神 八階建てで三十戸。住宅は県から半額助成なのですが、居住者をお年寄りだけにするのはやめましょうという堂本知事の考えで、四分の一を一般用にということになり、話が回って来たんです。建築も助成が出るから、と地主を不動産会社が口説き、行政が雑居福祉村にしたらどうかとやって不動産会社をニュー

スタートにつないで実現したわけです。八戸をニュースタートが借り、一階を保育園とコミュニティスペースにして運営、建物全体の管理をすることにしました。託児所もとりあえず二十人規模で、船橋市から半額助成が出ます。いずれ高齢者住宅のお年よりもじわじわと巻き込んで、地域通貨を使い雑居福祉村を実現してゆくつもりです。

それから、八戸のうち二戸を不登校児のためのスペースにしたい。千葉県全体で小中学校の不登校児が五千人居ます。千葉県の「菜の花スクール事業」という事業を請け負っていて、東金青年の家で月に一回一泊二日の合宿をやっていますが、子供たちが普段でも来れるような場所がほしい。県に助成させたいところだが、取りあえずは自前でオープンしてしまおうかと。

千葉は自然が豊かでいい道が多くて、使われていない施設がいっぱいあるので、三年計画くらいで、そういう施設をうまくいかして、土日は家族で歩く「千葉スローウォークの道」という行政の喜びそうな仕組みづくりもしたい。長期的には数家族で一緒に歩いて飯盒炊爨をしても、〈家族をひらく〉運動にもつなげる方向に県を引っばっていきたい。県には現役の先生が四万人、OBが二万人くらいいますから、その人たち

に働きかけて地域ごとにはじめることが出来る。青年の家は三十年前に全国につくられ、当初はもてはやされたが、いまは最盛期の数分の一の利用者数です。ユースホステルもそうですが、これからのいろいろなスペースがどんどんあまって来る。着実に信頼関係作りながらやっていくと、場所は必ず手に入ります。

●これからのNPO

二神 これからの福祉は、行政・株式会社・NPOのトライアングル共同体が担っていかざるをえないんですが、今の日本は組織ごとの引きこもり集団なので、その引きこもりから脱出させるコーディネーターがいるんです。それで、NPOがどのように行政に働きかけ、ほかの組織をどういうふうに巻き込んでいくか、デコとボコを補いあつてつないでいく力が問われている。国家破産時代に突入していて、行政も行き詰まっていますから。

稲邑 確かに福祉に限らずどの分野も、人や情報をつなぐコーディネーターが不足していますね。

二神 NPO法五周年記念の講演を聞きに行きましたが、ひとつひとつのNPOをどう伸ばすかだけで、

NPOがいろんな異質のものをコーディネートするという発想がない。相変わらず、行政はものわかりが悪くて、という話に止まっているんですね。僕は「つなげる人」を育てたいんです。もつと行政や公益団体を助ける必要がありますから。

日本の他のNPOから、一緒にやろうとか働きかけはあるんですが、「みな一緒に」と言っている分には何も進まない。最低のところでは合意が成立するので結局意味がないんです。よく言うんですが、高い志を持って泥沼をかき回せ。志の低いヤツはきれいに逃げると。現実には理想的な形には進まないです。十年先にはこれくらい、という高い志を持って、今十点二十点しかできなくてもそれをやっていくしかない。「その程度のことでは意味がない」「あれは雑居福祉村とは言えないのでは」とか言われたりしますが、こちらに向かって進むと明言して進んでいくしかないと思っている。

稲邑 確かにオルタナティブなものを目指す運動は何かを批判をすることで存在証明にする、それで気が済んじゃうような体質がありますが。

二神 そういう勢力として、かつての日本社会党はあった。今の若者は違う、そういうのに辟易している。

ですから、市民運動から来た人は手続きがむずかしいのでお断りするケースが多いですね。最近、家出妻とか、倒産夜逃げ社長なんか逃げ込んでくるのですが、そういう人たちが現実的で役に立ってくれています。彼らは核家族の呪縛を捨てていますから、人生をニュースタートさせやすいようですね。ただ、スローワークの出身については徐々に考えていかなあかんと。

稲邑 でも、それは実際にスローワークのモデルとなるような仕事場をつくっていくしかないのでは？

二神 スローワークの原則みたいなのをいくつか立てて、それを実現していく場をつくる。若者と話していると、それをやらざるをえない。今の若者は物欲はない。仕事そのものに喜びがあれば一番いいというのが強い。五十代以上の男となると、先立つものはお金と言いますから。先日もNPOをやりたい人が来たが、お金をどうしてつくったか、ばかり聞きにくるのですね。僕はやるべきことをどんどんやっていけばお金はいってくる、というふうにやって来たが、核家族を超えた大家族なので、ほんとにそうなるんです。

江口凡太郎

北海道滝上高等学校

卒業式までの登校日数が残り少なくなつたある朝、Sが学校に來ませんでした。彼はこの日休むと英語の欠席オーバーで、卒業できなくなつてしまふのです。すぐに携帯に電話、出ない！寝坊か？まさか、あきらめたか？とにかくメール！返信がないまま、調理実習の授業中も、携帯電話は首から下げたまま：マナーモードだと電話をとれない事もしばしば、一息ついたときにはっとして電話を見ると、着信メールに「やっちまった、今起きた」。すぐに電話すると、S「やっちまった、バス行っ

ちまったから間に合わない」凡「家族に送ってもらえないか？」S「無理」凡「タクシーで途中の〇〇商店まで來たら、迎えに行く」S「わかった」。

というわけで、Sを救出するため雪道を激走！約束の場所待つ。來た！タクシーに乗ったS！いつもと変わらない表情に、ほっとする（タクシー代は4千円、高校生にはかなりの痛手）。

凡「危なかつたあ、これで何とかなるぞ」S「ああ…。せんせー学校って何のためにあんの？」。卒業をかけて、一分一秒を争う緊迫した状況での第一声でした。

凡「えっ、うーん、オレは〓幸せになるための学校〓ってのが好きだな。学歴、勉強、部活、友達関係も結局は幸せになるため」S「そうだな、勉強だけなら塾でもいいしね」凡「その通りだ！幸せになろうぜ」S「…そうだな。あのさ、せんせー

はみんな、俺らに〓努力が足りない、もつとやれ〓って言うじゃん。お前らも、わかりやすく教えるように努力してんのか？って思う事ある」凡「うーん、痛い！お互いがんばらないとな！ところで、Sと同じことを千円札の夏目漱石が書いてるよ、国語の教科書に出てた、読んだか？」S「全然わかんねえ」凡「私の個人主義」ってやつたろ？努力しない教師は教える資格ないって100年前に書いてるんだ」S「わかんねえ」。

と、人生を語っている間に学校に到着。凡「急げ、間に合うぞ！」S「どうもね、ほんと助かった。せんせーいなかつたら、終わつてた」。

この一言で、またがんばろうって思うのです。Sは不思議な魅力を持った子です。彼は意地でも卒業したいのです。「卒業は無理だ」と見ていた周囲に対する怒りのパワーで、それを応援しています。残り2週間ですが、彼は1日も休めません。

ホリスティック教育の視点から考える

「ダイエット」①

梶原公子 (元公立高校家庭科教員・大学院生)

ダイエットという食行動

かつて高校教員として女子高校生と接していた時、とても気になることがあった。それは彼女たちが日々努力している「ダイエット」についてである。

例えば、昼食の時間になるとよく私の準備室に来てお昼を食べる生徒のうち、A子はいつもかんきつ類一個とヨーグルトだけだった。その

理由を聞くと、彼女は中学時代とても太っていて、男子生徒からからかわれたのだが、その後高校に入ってダイエットするようになってやせてきて、男の子から「きれいになったね。」と言われ彼氏もできた。「きれいになった」と言われとても嬉しいから、太らないようにしているのだという。あるいは、B子は華奢な体型であったが、彼女の友人によると野菜サラダを食べる時は必ず塩しか

かけない、菓子パンを食べていても一口しか食わず、あとは友達にあげてしまう、餃子はたれはかけないし、ティッシュペーパーで油をふき取ってから食べる、というほどカロリーを気遣っていたのだとか。

作家の中島梓はかつて摂食障害であったという。著書である『コミユニケーション不全症候群』（注1）ではダイエットについて論じており、そこで「ひとりの拒食症患者の陰には、およそ何百人のダイエット症候群の患者がいる。」と述べている。しかし、私が女子高生と接してきた感触から言うと、「やせたい」と思っている」（肥満ではないのに）自分は太っていると思う」「何かしらのダイエットを一度でも試したことがある」等々をすべて含め、それらの女性を「ダイエット志向」と呼ぶとしたら、その数は女子高生の八割以上にも及ぶのではないかと思う

ほどである。それほどまでに若年女性の間でダイエットは常態化した食行動になっている。

このような食行動のあれこれを見聞きするたびに、さっきやった家庭科の授業内容との隔たり、食べることにおける授業と生徒の実態との回路の繋がりやのなさに驚き、これはどのように考えたらよいのだろうかと思いつけてきた。

しかし「ダイエット」という食行動の問題は、女子高生の食生活のみではなく、生活そのものにとつて大きなウエイトを占めるものであるにもかかわらず、例えば家庭科教育において、まともに取り上げられたことのない問題でもある。

そこで、今回から数回にわたり、「ダイエット」を単なる栄養摂取や食行動という側面のみではなく、生活や社会状況、さらには価値観をも視野に入れた視点からとりあげ、前

回まで論じてきたホリステイック教育の視点からどのようなことが言えるのかを考えていきたいと思う。

「ダイエット」とは何が

肥満やダイエットは何も今日始まった問題ではない、という説もある。確かにすでに一九世紀、フランスの美食家ブリア・サヴァランは『美味礼賛』（注2）において肥満の原因やその予防、治療について論じている。しかし、ここで取り上げるダイエットは、都市化と情報化とがすすんだ社会に特有に発生する今日的な現象を指すことにする。

「ダイエット」という言葉は本来一日に確保すべき食事のことを指していた。それがいつの間にか病気を治すのに必要な養生食を指すようになり、さらに転じて、今日ではもっぱら体重減らしのために行う食事制

限の意味で用いられるようになった。したがって、ここでは今日の習慣にならつて、ダイエットとは体重減らしのために行う食事制限を指すことにしたい。

ダイエットという食行動が成立するためには、必要最低条件がふたつある。

ひとつはその社会が「飽食」と言われるように、食べることに困らないほど経済成長を遂げた社会であること。もうひとつは、「スリムであること」、やせていること、スレンダーであることが社会の価値になっていることである。

このふたつの条件を満たす社会で起きている「ダイエット」をここでは問題にしていきたい。

栄養摂取状況と「ダイエット」

若年女性がどれほどダイエット

という行為を行っているのかを指し示す、ひとつの指標になるのは、「栄養調査」の結果である。そこでまず、平成一四年版(二〇〇二年)の『国民栄養の現状』(注3)を見ておくことにしたい。

若年女性である、一五—一七歳の人の一日のエネルギー所要量は、やや低い生活強度の場合一九五〇Kcalであり、普通程度の生活強度では二二〇〇Kcalである。一八歳から二九歳の女性だと、やや低い人は一八〇〇Kcal、普通の人は二〇五〇Kcalである。平成二二年度調査の結果によると、エネルギー摂取量は一五—一七歳は一八八四Kcalであり、六六Kcalから三一六Kcalの不足である。一八一—二九歳では一七六六Kcalであるから、三四Kcalから二八四Kcalのエネルギー不足である。また、たんぱく質は所要量を超えている

ものの、鉄分やカルシウムが所要量以下となっている。

やせと肥満を決定する栄養素はエネルギー源となるたんぱく質、脂肪、炭水化物の三栄養素の摂取量であるから、エネルギーにならない鉄とカルシウムはこの際除外して考えなければならぬ。エネルギー不足は単純なやせに繋がるから、上記の結果から、若年女性は脂肪と炭水化物の摂取量の不足、つまり食事制限、ダイエットが多くの人の間で行われているということが出来る。

次に、肥満度の指標となるBMI (Body Mass Index) の指数を見てみたい。BMIは二—二四が標準とされ、一八・五以下は「やせ」とされている。二〇—二九歳の女性についてみると、BMI二五以上の人は、二〇年前(一九八〇年)には一二%ほどであったものが、二〇〇〇年では六%くらいに減少してい

る。さらに一八・五以下のものは一三%であったものが、二〇〇〇年は二五%と増加している。このことから、二〇代の女性は、この二〇年間で肥満の人が減少し、やせの人が増加したのである。

以上、栄養調査結果の数値から、二〇代女性はエネルギー所要量(脂肪と炭水化物の摂取量)が減り、それに伴ってBMIの数値も減少し、やせている人が増加したことがわかる。

「スリム」であることが 価値になった時代

ここまでのところから、ダイエットが体重減らしのための食事制限であり、多くの若年女性がダイエットを行うことを常態とし、彼女たちの間では「やせていること」「スリムであること」が大きな価値を持つ

ている現状を確認することができ
た。

次に考えなくてはならないこと
は、そもそも「スリム」であること
は一体いつから価値になったのか、
そしてまたどうして「スリム」であ
ることが女性の価値になったのかを
検討することである。一言で言えば、
「飽食」であることと「スリムであ
る」ことが価値になるといふたつ
の要件が揃ったのは、高度経済成長
を遂げた一九六〇年代である。そし
てまた六〇年代は女性の理想体型が
転換した年でもある。

私的な話で恐縮だが、私はこの
一年間武田秀夫(注4)さんが主宰
した「黒澤明の映画を読む」という
大学の公開講座に出席し、全三〇回
で戦前戦後を通して黒澤明作品の映
画三〇本のほとんどを見た。黒澤映
画は家父長制的権威主義の立場に立
った作品が多く、フェミニズムとは

縁が遠いものである。しかし、同時
代を映し出す鏡としてこれらを見た
とき、そこに登場する女性、ことに
その体型には興味深いものがあっ
た。六〇年以前の作品に登場する女
性(女優)像は、一様に豊潤、豊か、
リッチな体型なのである。『すばら
しき日曜日』の中北千枝子、『羅生
門』の京マチコ、『白痴』の原節子、
『どん底』の山田五十鈴、『生きる』

の小田切みきなどは、いずれも迫力
ある体躯をしていて美しい。今日売
れっ子といわれる「女優」の、薄っ
ぺらい体型と見比べてみればその差
は歴然としていている。それがほぼ
六〇年代を境にして、リッチな体型
は衰退し、薄っぺらな体型が「美し
い」といわれるようになっていった。
このような女性像の転換は六〇年に
起こるのだが、そこはどのような事
情があったのだろうか、六〇年代と
はどのような時代であったのだろうか

か。

「スリム」であることが価値にな
った最も大きなきっかけについて、
精神科医の斎藤学は、六〇年代にト
ウイギーが現れ、細身の女性をもて
はやされ、太っているのはみっとも
ない、やせているのが美しいという
スタンダードができた、と述べてい
る(注5)。つまり、六〇年代にそ
れまで主流であった女性美のスタン
ダードが、トウイギーをきっかけに
反スタンダードに転じていったとい
うのである。

一九六〇年代すなわち昭和三〇
五年以降というのは、岩戸景気、所
得倍増に象徴されるように高度経済
成長が達成され、核家族化、中流意
識の進行、新三種の神器やインスタ
ント食品の出現した時期である。こ
のようななか、女性は家庭で家事に
専念する「結構なご身分」としての
主婦になるのが理想とされていく。

女性の主婦化は、つらい農作業に携わることなく、経済保障された地位の確保を意味していた。同時に女子の大学、短大進学率が七、四％に上昇し、女性の平均寿命は七〇歳に達するのである。これらの現象は、敗戦後憲法や民法の改正によって、男女平等思想が導入され、さまざまな分野で女性の地位が向上していったことを物語っている。しかし、教員、看護婦、保母などを除けば、女性が経済的に自立し得る賃金労働がほとんどないのが現実だったし、この時代「女子学生亡国論」が起り、「家庭科の女子のみ必修」が決定し、性別役割分業の固定化がすすんでいった。要するに、女性に対する解放と抑圧とが同時に巧妙に進行し、その狭間で理想の女性体型の反スタンダードが起ったとみる事ができる。その後テレビや雑誌などのマスコミや洋服やファッションなどさま

ざまな分野で、「スリムな女性」が理想とされるようなプロパガンダが起り、多くの若年女性の心の中に価値観として構造化されていくのである。このような価値意識は、その後三〇数年経過した現代まで一貫して維持継続されつづけ、今日に到っていると思われる。

今回は、この三〇数年間に、ダイエットと女性の関係にどのようなことが起ったのかを見た後で、ダイエットがその中でどのように語られて行つたのかについて検討していきたい。

（注1）中島梓 一九九一『コミュニケーション不全症候群』ちくま文庫
（注2）ブリア・サヴァラン 一八二六 一八九三『美味礼賛』関根秀夫、戸部松実訳 岩波書店
（注3）健康・栄養情報研究会 二〇〇二『国民栄養の現状 平成一二年度厚生労働省国民栄養調査結果』

第一出版

- （注4）武田秀夫 エッセイスト 映画評論、著書多数。本講座は和光大学公開講座「ばえでいあ」の一つ。
（注5）斎藤学、富田香里 一九九八『なぜ、私たちの悲しみは「食」に向かうのか』講談社

「覚醒」と「自立」のための「ジェンダー論」

女子大での教育経験から

第5回 恋愛中毒を克服する（その二）

沼崎一郎

（東北大学教員）

○×テストの結果を見せあいながら、学生たちはガヤガヤと喋っている。いつものコーヒーを一口飲んで、「恋愛中毒症に罹っている人は、早く解毒剤を飲みましょうね」と言いながら、私は黒板に大きく「解毒剤」と書き、1〜4と番号をふる。

- 1、自分だけの時間を持つ。
- 2、自分だけの友だちを持つ。
- 3、自分だけの興味を持つ。
- 4、自分だけの仕事を持つ。

「いつも一緒に居たいと思うのが間違いです。自分だけの一人の時間を持ちなさい。一人でもできることはいくらでもあるでしょう。そして、一人でじっくり自分のことを考える。男のことはかり考えるんじゃないの！」

要するに、頭を冷やせということだ。クールに自分を振り返ることが、自立への第一歩となる。

「恋人以外の友だち、それも彼と

共通の友だちではない、自分だけの友だちを持つことが大切です。そうすれば、何かあっても安心して相談できるし、別の視点からアドバイスがもらえるでしょう。それに、彼と切れても、仲間がちゃんとしている。いざという時に、味方になってもらえるでしょう。」

変な話だが、よほど強い人、よほどできる人でない限り、自立というのは、一人でできるものではない。仲間に励まされ、時々助けられながら、なんとか立ち上がるのが自立だ。彼にベッタリ貼りつかなくてもいいように、常日頃から、自分を支えてくれる仲間たちのネットワークを作っておくことこそ、自立への近道である。

「自分だけの女友だちは大事だよ。それと、異性の友だちも忘れずに。男は彼一人しか知らないといっているので、男を見る目は養えないよ。それ

に、恋人以外の男と普通に友だち付き合いができれば、仕事も何もできないでしょう。」

仲間は多いほうがいい。そして多様なほうがいい。視野が広がるし、楽しみも増える。何より、恋人しか付き合いがないとなつては、恋人を失うこと＝孤立になってしまう。それでは恋人に従属してしまうし、捨てるのが恐怖になる。

「自分が本当に好きな趣味、それも彼とは違う自分だけの趣味を持たないといけないよ。恋愛以外の趣味だぜ。そうすれば、彼がいなくても一人でハッピーになれるでしょ。彼が好きなことを私も好きってのは絶対ダメ！ それじゃあ、何でも彼頼みになっちゃうから。」

自分作りの基本は、自分だけの興味関心を持つことだ。打ち込めるものが何か一つあれば、一人でも生きていける。もちろん、一緒に楽し

める仲間がいればもつといいが、仲間がいればいいというものではない。むしろ、誰が何と言おうと、世界中の人間に反対されようと、私これが好きだ、絶対止められないというものが要だ。それさえあれば、自分を失うことはない。

そして、最後はやはり仕事。

「自分の仕事、自分の収入があれば、結婚しなくても生きていけるでしょう。それが、自分の興味にあつた仕事だったら理想だけど、そうでなくても、一人で食べていけるだけの稼ぎがあれば、彼に捨てられても平気だよ。卒業したら、とにかく就職する。そして、決して辞めないこと！ 今のまんまで、仕事見つかると？ 大学に在るうちにしっかりしないと、就職できないぞ！」

最後はまたまたオドシ気味だが、授業で聞いたことなど翌日はコロツと忘れる人たちが。何度でも繰り返

さなければいけない。

この4つの解毒剤は、男依存症にも効くはずだ。

「自分だけの時間、友だち、興味、仕事を持つって、考えてみれば当たり前のことなのに、どうして忘れがちなんだろう。」ある学生の感想だ。忘れがちなのは、恋愛中毒で男依存だからだ。恋愛中毒で男依存でなければ女じゃないと思ひ込まれているからだ。少女マンガにトレンディドラマ、出てくる女は恋愛中毒の男依存症ばかりじゃないか。染まつて当然である。社会が忘れさせようとしていることを、思い出させなければいけない。それが私の任務なのだ。

それから、自立した愛とはどういうものかについて話をする。前回書いたように、私は、「本当の愛」とは「暴力の反対」だと考えている。暴力が「こわがらせ、あやつる力」

だとしたら、その反対は「安心させ、自由にさせる力」だ。

「いいですか、二人で縛りあうのが愛ではありません。一人でいると自由だけれど、二人でいると不自由だというのは、愛していることにならなんだよ。本当に愛しているなら、相手が安心して伸び伸び自分を活かせるようにしてあげなさい。一人でいると不自由だけれど、二人でいると一人の時よりもっと自由になれるという関係を作らなければ。」

「だから、彼女が飲み会で楽しんでいるなら、じゃましないで楽しませてあげなくちゃ。心配だから電話するんだとか男は言うけど、一体何を心配してるんだろかね。本当に彼女の安全を心配してるのかな？ そうではなくて、他の男が『俺の女』に手を出すのが心配というのが本心じゃないか？ あるいは彼女に浮気

されたら大変とか、要するに自分が傷つくのを恐れてるだけじゃないの？ だって、たとえ側にピッタリくっついてたって、本当に恐い暴漢に襲われたら、彼女と一緒に二人でボコボコにされるのが落ちでしょう。」

「愛するって、信頼することだよ。本当に信頼していたら、彼女が飲み会で楽しんでいたらって少しも心配にはならないはず。夜道が恐いかどうかだって、彼女が自分で判断できることでしょ。恐いときには迎えに来たって電話するんじゃない？ 彼女に呼ばれてから迎えに行けばいいじゃん。本当に彼女のことを心配なら、いつ彼女から電話が来てもすぐに飛んでいけるように準備して、じっと待つてればいいんだよ。じゃませずに、ね。」

「信頼って何だと思う？ 『走れメロス』の話は知ってるよね？」念

のために教室を見渡すが、どうやら頷く学生のほうが多い。「メロスは、あのまま逃げちゃったほうが得したよね。帰ったら死刑なんだから。それでも彼は裏切らずに走って帰った。そして、彼の友だちは、そう信じていたから身代わりになった。つまりね、信頼するってことは、『裏切ったほうが得な時でも、絶対に裏切らないと確信している』ってことなんだ。もちろん、信頼に応えるってことは、『裏切ったほうが得な時でも絶対に裏切らない』こと。だから、本当に相手を信頼していれば、何も心配せずに任せて自由にさせるものなんだよ。」

「縛るってことは、信頼していない証拠でしょ？ 彼が縛ってきたら、君たちは信頼されてないってことだよ。彼を縛りたいと思うとしたら、君たちも彼を信頼してないね。お互いに相手が信頼できずに縛りあ

わずにはいられないとしたら、それ
って愛しあつてる関係だつて言え
る？」

私としては、核心を突いたイイ
話をしていると思つている。ところが、
私の「愛⇨信頼⇨自由」説は、
学生たちに通じないのだ。感想文を
見ると、少なからぬ学生が「縛らず
に自由にさせるなんて、冷めた関係
だ」と書いている。「信頼して自由
にさせあうというのは、友だち関係
であつて、恋愛じゃあない」という
感想も多い。「先生の話を聞いてい
たら、友だちと恋人の区別が付か
なくなった」と書く者さえいる。「彼
にはもつとこままつて欲しいと思
う」のだそうだ。カァーッと熱く燃え上
がったら縛りあわずにはいられない
はずだ、それこそが熱愛だと信じ込
まされているわけだ。熱愛至上主義
とでも呼ぶべきイデオロギーが、彼

女たちを支配しており、縛られるこ
とこそ愛されている証拠と錯覚さ
せ、暴力と愛情の区別がつかなくな
つて、ずるずるとDVへの道にはま
つてしまう……。こうなると、もう
カルトだ。まさに、ネツアイ真理教。
洗脳されたカルト信者の救出ほど難
しいことはない。頭を抱えてしま
う。カルトにはまつてしまふのは、
自分に自信が持てないからかもしれ
ない。ある学生は、こう書いている。
「私は、信頼されすぎて自由にされ
るのは少し怖い。自由って一番楽な
ようで、実は一番怖いものだし、そ
れにともなう責任とか……私にはま
だ重い気がする。」

自由が怖いというのは、何も女
子大生に限つたことではないだろ
う。とかく日本人は「おまかせ」が
好きだ。政治は地元の代議士セン
セイに「おまかせ」。料理は板前さん

に「おまかせ」。だから、彼女たち
も、彼に「おまかせ」で「しあわせ」
になりたい、「おまかせ」で「しあ
わせ」をくれる彼が欲しいと思つわ
けである。それでは、人生の丸投げ
ではないか。丸投げが得意なのは、
どこかの首相だけではない。深刻な
問題だ。今からでも遅くはない。
「自分のことは自分で決める」とい
う自立の基本を身につけて欲しいと
思う。そう思つて、自立、自立と呪
文のように唱える私である。

しかし、本当はもつと早くから
教えるべきなのだ。息子には「自分
で決める」ことを幼稚園から教育し
た。入園前に、デパートの売り場で、
バッグから弁当箱から全て彼に選ば
せた。彼は、赤いキティちゃんの弁
当箱を選んだ。後でどうなるかは分
かつていたが、何も言わずに買って
やった。案の定、年中組になると、

クラスの子から「男の子なのに、キティちゃんなの？」と言われ始め、彼は気にしだした。「男の子がキティちゃん好きだっついていいじゃない。ウルトラマンが好きなら女の子だっついていいさ。」そう励ました。頼んだら担任の先生もクラスの子たちと同じ話をしてくれた。先生にも支えられて、彼は安心してキティちゃん弁当を持って幼稚園に通い続けた。

エンパワーしてくれる味方が近くにいれば、幼稚園児でも自己決定を生かすことができる。大切なのは、そうした味方の存在である。

「自分のことは自分で決めていいんだよ。自分で決めたことを、助けられながらでいいから実現しようよ。応援してあげるよ。」と私が言うとうと、「そんなこと言われたの初めてだ」という学生が少くない。私たちにできること、私たちがすべきことは、味方になって支えることだ

と思う。彼女たちが、安心して自由になれるように。

ご質問・ご批判を歓迎します。
numazaki@saltohokua.ac.jp まで電子メールでお寄せください。

.....フ・エ・ミ・ツ・ク・ス・の・ほ・ん.....

『やさしい英語でフェミニズム 英語で女性問題を語るためのワンポイント・レッスン』
Colors of English編 吉原令子監修 1,260円

女性問題を語るときによく使われる語彙や表現を、わかりやすくまとめた本。

『居場所考—家族のゆくえ』水田宗子著 1,800円

映画や小説を題材に、女性の、そして男性のさまざまな居場所を探る、珠玉のエッセイ集。

『Working With Women—性暴力被害者支援のためのガイドブック』
フェミニストセラピー研究会編 1,050円

『わがままな女は幸せになれる Let's 自己表現・自己主張トレーニング』
河村ふみ著 1,050円 (価格はすべて税込み)

Femixフェミックス TEL/FAX 03-3424-3603



左の黒い丸を
どんな方法でも良いから
消してください。
消し方の方法を述べよ。

オモテ
↓



ウラ
↓



(リンゴのイラスト)

授業の後、いつもは「授業がつまらない。興味がわからない。」と欠席しがちなK男が珍しく寄って来て、「カトー今日はよかった。今日のは。6年間の中で1番マシな授業だったな。こういうテーマ自体はさあ、社会や国語でもやってるけどさあ、社会の授業でやらせ報道について何時間やるよりも、この黒い丸の実験10分やるだけで、目からウロコって感じなんだよ。いろんな教科ってつながっているんだからさあ、家庭科は家庭科らしい、こういう切り口を、もっともっと研究していけよな。カトーたちはそれで金もらってんだからさ。」

中1から6年間つきあって来て、初めてもらったK男からのエールでした。家庭科の独自性とは？とはよく言われる（問われる？）ことですが、独自性とは、その内容もさることながら、より大切なのは<切り口>の方なのかもしれないと考えさせられた1時間でした。

最後に生徒たちのコメントをいくつか紹介しておきます。

「プロバガンダヲミヤブル眼ヲ持トウ 僕ヲハミンナ タマサレテル。」(K男)

「外部から情報を得るのに、視覚はメチャ大きい影響をもたらしているということを知りました。あんましこれに依存しないでいけたら、また違うものの見方ができるのかな。」(T男)

「やらせ写真はやらせなので確かにウソ。だけど本当はどこかでそんな風になっているかもしれない。そこまでヒドイ状態なんだって事を伝えるためのウソならそれもまた真実といえるのではないかな。」(M子)

【参考文献】「答えは一つとは限らない」 広瀬之宏（遊タイム出版）

カトーさんの授業スケッチ

“洗脳の実験”の巻

加藤昭仁

私立中・高校家庭科教員

「この図のプリントの黒い丸をどんな方法を使ってもいいので消してください。あなたならこの問いに、どんなく答え>を出されますか？

やわから頭のうちの生徒たちのく答え>は、「黒い丸のまわりを正方形になるように黒くぬっちゃう」「プリントを半分に折って見えなくしちゃえば」「黒い丸の上に自販機の紙コップを置く」「ヤギにあげる」「丸い部分をハサミでくりぬく」中には、後の方で本当に丸い部分をライターで焼いて、「ほら消えた！」なんて言ってる、やんちゃな生徒もいて、ちょっとドッキリ。

実はこれ、くマスコミ情報のウソ・ホント>と題した授業の1コマである、「洗脳の実験」なのです。

生徒たちに答えてもらった後、「ところで最初、このプリントに何が描いてあった？」とたずねると、当然のように「黒い丸でしょ。」と返ってきます。

そこですかさず、「そうだよ、っていうことは、視覚的には黒い丸を消せても、いったん意識の中に入った記憶は、もうそう簡単には消せないってことだよ。だから、TVのCMやいろんなニュース報道は、怖いとも言えるのさ。」と結びと、生徒たちから「おースゲー。」「カトーただのオッサンじゃなかったんだあー。」という反応が返ってきました。

授業ではこの他に、りんごの写真を見せて「これは何？」と問いかけた後、もう1枚このりんごの裏半分が実は切り落とされて、果肉と種が写っている写真を見せ、映像のマジックについて考えたり、また仲むつまじい家族の写真を見せた後、もう1枚、その写真に「もしあの日がなかったら」というコピーがついたものを見せ、コピーのある無しでは、印象がどう変わるかという編集のマジックについて考えたりもしました。



ほかほか包子

パオツ

中国に私は行ったことがない。しかし、子ども時代北京に住んでいた父親から、終戦を期に引き揚げてきたという大変な経験や中国での生活を何度となく聞かされてきたため、まるで行ったことがあるかのような身近さを感じている。父は、テレビで中国残留孤児（孤児というのは失礼な感があるが）について放映されるたびに、真剣に見入り、「人ごととは思えん。自分とはよくぞ連れ帰ってもらえたも

のだ。」と涙を流さんばかりの態。そして、北京らしい饅頭の売り子の声を真似して聞かせてくれたり、よく食べたという木の葉形の揚げパンを作ってくれたりした。

最近中国を旅行した伯母（父の姉）の話によると、文化大革命を境に腕のいい料理人はいなくなり、北京の味はすっかり落ちて食文化の伝承は損なわれているように感じたそうだ。子ども時代に食べたものとすっかり味が違っていたらしい。また、中国の朝食は「北は饅頭、南は粥」と思っていたのに、戦後何度か中国を訪れている父の話では、天安門事件以降は北京でも朝粥を食べるようになってきているらしい。

今回紹介するのは、包子（肉まん）と粽子（肉ちまき）。どちらも実習で作っているが、「本格的！」と学生に好評である。中国に行っ

たことがなく、本場の味を知らない私が言うのも何だが、包子は、冷凍やチルドでその辺で売られているようなものとは雲泥の差のおいしさ。意外と簡単にかつこよい形にでき上がる。ふっくらと蒸し上がった包子を手にとると、作る苦労も報われ、ほかほかふんわり気持ちまで温かくなる。本場の包子は老麺と呼ばれるもたねを使って発酵させるが、ここではベーカーキングパウダーとドライイーストを使う。粽子も、手作りすると出回っている冷凍ものよりぐっと上質になる。竹の皮がなければホイルに包んでもいいし、包まずに蒸してもよい。冷凍保存もできる。正月のもちのためのもち米が余っていたら、是非お試しあれ。おいしくかつこよくできること請け合

いである。
饅頭＝点心の一つで、小麦粉をこね

て発酵させ、蒸したものの。中に何も包まない。

包子^{パオツ} 中に具を包み込んだ饅頭

粽子^{ツォンツ} 中国のちまき

老麵^{ラウメン} 饅頭、包子の発酵に使うもたね

湯^{トウ} 中国のスープまたはだし

●包子^{パオツ} (肉まん) (5人分)

- 〔材料〕薄力粉200g、ベーキングパウダー4g、砂糖20g、塩1g、ラード12g、ドライイースト4g、水108g、豚ひき肉100g、白菜100g、干しいたけ小2・5枚、長ねぎ1/5本、しょうが1片、酒10g、ラード10g、しょうゆ10g、ごま油10g、塩1・7g

〔作り方〕

- ①ボールにふるった小麦粉を入れ、中央をへこませてラード以外の材料を入れてよく混ぜる。途中でラードを加え、さらにこねる。
- ②さらにしつかりこね（こね上がり28℃が理想）、約10分間室温で発酵

させる。

- ③生地を正確に計って5等分し、きれいに丸めて乾いた布巾をかけ、再度約10分間ねかせる。

- ④具の白菜はゆでてみじん切りにして軽くしぼる。干しいたけはもどし、みじん切りにする。長ねぎ、しょうがもみじん切りにする。豚ひき肉と野菜、調味料を混ぜ、よくねる。

- ⑤③の生地を麺棒でのばす。中央部は厚め、ふちは薄く、円形にのばす。

- ⑥具も正確に計って5等分し、生地の中央にのせてひだをよせながら包んでいく。

- ⑦きれいによせたひだは、最後にまとめてひねり、しつかりと止める
- ⑧7cm角に切った経木またはパラフィン紙の上に乘せ、約30℃で10分間発酵させる。

- ⑨蒸気の上があった蒸し器で約15分間強火で蒸す。蒸し上がったら取り出して、あおいでつやを出す。

●粽子^{ツォンツ} (肉ちまき) (5人分)

- 〔材料〕もち米300g、豚もも肉150g、干しえび25g、干しいたけ3枚、ゆでたけのこ72g、松の実10g、竹の皮5枚、A(砂糖2g、こいくちしょうゆ23ml、酒23ml、湯150ml、塩少々、サラダ油25g)

〔作り方〕

- ①米を洗って一晩水に浸す。ザルにあげて水気を切る。
 - ②豚肉は1・5cm幅に切り、たけのこは1cmの短冊切り、干しえび、干しいたけはもどして、干しいたけは1cm角に切る。
 - ③中華鍋を熱し、分量の油を入れ、豚肉・たけのこ・しいたけ、えびを炒め、残りの油を足して米を炒める。松の実を加え、合わせ調味料Aを加えて汁気が無くなるまで煮る。
 - ④③を竹の皮に包んでタコ糸で縛り、蒸し器で約20分間蒸す。
- (さかもと・かおる イラストも著者)

木村栄

連載「女が歳をとるといふこと」 80

母の一七回忌である。

明治に生まれて、大正、昭和を生き抜いた母は、一生を着物で通した。

洋服を着たことは一度もない。ひそかに準備した服を見せられたことはあるが、着用には及ばなかった。

着物教室風の肩の凝りそうな着方ではなく、ゆったりと襟元をくつろがせた、着崩れしようなリラックスな着付けで、自在にからだの動きに馴染んでいた。晩年、体調を崩した折りなど、寝床に座ったまま着物を着替え、帯を締め替えているのを見て驚いたものである。



着物を生活の手段として使いこなしていた、私の知る限り、最後の女性であった。

その母の年忌だから着物でと申し合わせたわけではないが、姉妹の間には同じ気分が通じていた。だが、私は法事用の帯を持っていない。今までは色無地の着物に喪服の黒の帯で済ませてきたが、一七回忌ともなれば、それではもう重い。相変わらず気が利かないネ、と母をやきもきさせてしまいいそいだ。

ご近所の知人に相談してみた。

元お茶の先生で、私の知恵袋である。

領いた彼女は、すぐ帯箆筒から一本の帯を取り出ししてきた。利休鼠の地に鳥羽僧止の鳥獸戯画を薄墨色で染めた一本。わあオ、ぴつたりだ。

と言うわけで、我ながら満足できる出で立ちで出かけた。

最初のコメンテーターは、駅前の花屋の親父さんである。

「おつ、今日はお茶会かい。いいねえ、ぐつと渋いねえ」

次は、ラッシュユの駅から吐き出された行きつけの美容院のMさん。路の真ん中で、私の「道行き」をめぐって帯を一瞥すると、

「あら、ご法事ね。素敵な帯！」

山の手インテリ風の気取りが苦手だ、と思っていたこの街、なんだか私の生まれ育った下町に似てきたようだ。

これなら母も安心するだろうと意気揚々とお寺に着き、お経を聴いているうちに気がついた。生きていた人はごまかせても、冥土の母はごまかせない。

「人様に借りるなんて」と、渋い顔で不肖の娘のふがいなさを嘆いているに違いない。

わがまま映評⑩

「息子のまなざし」

満田康子

職業訓練校で木工を教えるオリヴィエは、中年の寡黙な男性。ある日、少年院を出所したばかりの少年フランシスがやってくる。オリヴィエはフランシスに道具の手入れから懇切に指導するのだが、偏執的に彼の存在を気にして、鍵を抜き取って部屋に侵入し彼のベッドに寝ころんだりする。ほとんど音楽はなく会話も極端に切りつめられていて、ことは無言で進む。ストーカーかと思ってしまうような気味の悪さがあるが、別れた妻とオリヴィエとのやりとりで、フランシスが彼らの息子を殺した犯人であることが分かる。フランシスはオリヴィエが誰だかを知らない。父の居場所も知らず、母のカレから疎まれていたの言葉から推察される、家庭的に恵まれない子供時代を送ったフランシスは、オリヴィエに畏敬の念を抱くようになり、後見人になってくれと依頼する。「なぜ息子を殺した犯人の面倒を見るのか」と元妻に激しく詰問されて、答えられないオリヴィエ。彼はフランシスを許そうとしているのか復讐しようとしているのか。カメラはい

つもオリヴィエの後ろ姿をとらえているため、視線や表情は見え、彼の心の動きはわからない。オリヴィエはフランシスを木材の買付けに一緒に連れていく。長いドライブで無防備に眠り込むフランシスを、運転しながらちらちら見るオリヴィエ。緊迫した場面が続くが、何も起こらない。人気のない木材置き場に置いて、突然オリヴィエは、「おまえが殺したのは私の息子だ」と言う。反射的に逃げるフランシス。「少年院に五年いて十分に罪を償った」と叫ぶ。追うオリヴィエ。ハリウッド映画だここで木材が崩れて派手な場面になるのだが、この映画はあくまでも静かだ。二人の足音と息づかいが聞こえるのみ。森に逃げ込み倒れたフランシスの細い首にオリヴィエの手がかかる。そして最後のシーン。オリヴィエの背後にそっと近づいてきたフランシスは、木材を車に積み込むの手伝う。

フランシスは一六歳だから、殺人を犯したのは一一歳の時。薄幸な目をした少年に亡き息子を重ねて、オリヴィエの「父性」が揺り動かされたのだろうか。彼が美しく従順な少年でなく反抗的で凶暴な大人であったとしても、オリヴィエは「許す」という行動に出たであろうか。

加害者である少年と被害者の父親との再生の物語。深く重いテーマであるが、小さな映画館は満員だった。ではあるが、正直言って、美しくもない中年男の首筋をずーっと見せられるのは苦痛だった。眠くなる。少なくとも人がそう感じていたようで、静かな映画館にアメやガムの紙をむく音が始終聞こえた。

この監督の「ロゼッタ」を数年前に見た。貧しい少女が自分の恋人を裏切って、ささやかな職を奪い取るすさまじい映画で、そのダイナミックな構成に呆然とした記憶がある。この映画は対照的に、余分なものをそぎ落とし語らないことによって語ろうとしているのだが、私的にはスピードであふれる「ロゼッタ」の方が好きだ。

(ジャン・ピエール・リュック・ダルデンヌ監督／ベルギー・フランス／2002年)

英語で
女性問題を
語るための
ワンポイント
レッスン

番外編

Jan./01/2004

お正月早々、仕事をした。というよりは、大晦日からコンピュータに向かってエッセイを書いていたら、お正月になってしまった。元旦にコンピュータをたちあげると、Mac（マッキントッシュ）は「あけましておめでとうございます」と画面一杯に出てくる。去年はMacで終わり、今年はMacで始まるといった感じ。Happy New Year's e-mailに「Macは永遠に私のボーイフレンドだ！」と書いたら、友人からの返信で「どうしてReiko's Macは男なの？」と言われた。私って、カップリング幻想が強いのかしら???

I worked on New Year's Day. Actually I worked on my essay with my computer on New Year's Eve and kept working on into New Year's Day. On New Year's Day, "A Happy New Year!" came out on the screen of my computer Mackintosh. My year 2003 closed with Mac and my year 2004 starts with Mac. I e-mailed my friends "Mac is my boyfriend forever!" and got a question from one of my friends, "Why is Reiko's Mac a boy?" I wonder if I'm soaked in the culture of couples.

Jan./07/2003

1995年に、住友電気工業の女性社員2人が、昇進や昇給で不当な性差別を受けたと訴えた。先日、やっと結審し、会社は原告2人を昇格させ1000万円の解決金を払うことで和解が成立した。事実上勝訴だ。

日本は先進国の中で賃金と社会的地位における男女格差がもっとも大きな国である。女性の平均賃金は男性の6割しかなく、管理職は極端に少ない。コース別雇用など間接的な差別をなくす法を整備するように、昨年の夏、国連の女性差別撤廃委員会から日本政府は言われたばかりだ。

正社員同士の男女差別をなくそうとする動きがある一方で、企業が正社員をパートや派遣に置き換える傾向がますます強くなっている。その多くが女性であることは言うまでもない。形を変えた男女差別が進行しつつあると思っているのは私だけではないはず……。

Two women in Japan's Sumitomo Electric Industries Ltd. accused the company of sexual discrimination in promotion and pay in 1995. A few days ago, the lawsuit was finally settled and the company agreed to promote the women to new management-level posts and pay 10 million yen (\$93,400). Actually these two women won the lawsuit.

However, among developed countries, Japan is one of the countries which has an extreme difference in wages and social status between men and women. Women's wage is 60 % of men's. The percentage of women's management-level posts is low. The Committee on the Elimination of Discrimination against Women in the UN told Japanese government last year that Japan should make laws against indirect sexual discrimination for employment such as a career-tracking system.

While sexual discrimination among full-time workers is slowly being eliminated, many companies tend to hire temps and part-time workers. As everyone knows, most of them are women. Not only me, but also many women notice that a new type of sexual discrimination subtly is going on.

●英語講座等の情報はHPをご覧ください→<http://www.alpha-net.ne.jp/users2/rei0225/>

吉原令子

(大学講師 <http://www.alpha-net.ne.jp/users2/rei0225/>)

「派遣社員は得か損か？」シリーズ

派遣社員のほとんどが女性で、20代/30代であるという事実をみれば、そこにジェンダー差別的な臭いがプンプンしていますよね。多くの女性がその不利さを知っていても派遣社員になるのは、女性の正社員の求人募集が少ないからなのです。性差別がなくなったのではなく、性差別が巧妙になったのです。

【1】 [知っておくと便利な英語表現]

I wonder if it's better to be a temp than a full-time worker.

(正社員よりも派遣社員になったほうがいいかなあと思うんだけど。)

【2】 [さあ、実践!] (会話編)

Hiroko: I wonder if it's better to be a temp than a full-time worker.

Alice: I don't know about that, temps can't get any bonuses or benefits, you know.

Hiroko: I know, but our company is in bad shape. My salary is very low. I can't see any hope in my company.

Alice: Then you should get more qualification and go job hunting.

ひろこ：正社員よりも派遣社員になったほうがいいかなあと思うんだけど。

アリス：どうかなあ、派遣社員はボーナスも福利厚生もないよ。

ひろこ：それはそうだけど、うちの会社、今危ないの。お給料も低いし。希望とか見えないのよね～。

ベス：じゃあ、資格を取ってから仕事探しをしたほうがいいんじゃない。

- ・ temp 派遣社員
- ・ full-time worker 正社員
- ・ bonus ボーナス
- ・ benefit 福利厚生
- ・ be in bad shape 状態が悪い
- ・ get more qualifications 資格をとる

いろんな生き方を教えてもらって

松本一郎

まつもといちろう／キミ子方式 講師
◎ご感想・ご意見おまちしています。
ichiro-m@ka2.so-net.ne.jp



年末の慌ただしさが街中に漂っている一二月末の朝、突然、父親から電話が来た。ボクが一五歳の時に

両親が別れ、それから二年は彼と一緒に暮らしていたが、その後、精神的に不安定で被害妄想が強い彼に、恐怖を感じて家出同然に家を出てから、何年か一度くらい会うような関係を続けている。

一昨年に弟が突然亡くなって、その後の事務処理の中で、父親の押印が必要な書類があり、それをもらいに出かけると「今まで、父親として認めないようなつきあい方をしてきたくせに、こんな時だけ親として判をつかなければいけないなんて、納得できない」と拒否されてしまった。ボクにしてみたら、単なる事務

処理なんだからこんな時だからこそ協力してくれてもいいのに、と言い争いになり、それからまた音信不通になっていった。しかし、どうしても必要な書類だし、その件が片付かないと気持ちの整理もできないままになっていたので、ボクの現状や家族

の様子、そして押印のお願いを書き綴った少々長い手紙を書いて彼に送ったので、それに応えての電話だった。二日後の午前中に彼の家を訪ねる約束をして電話を切った。

彼は三年前に自分の作品である家の改装中に屋根から落ちて大けがをし、長く住んだ家も立ち退きになり、その後、生活保護を受けてアパートで暮らしている。訪ねる前は、また意見があわずに争いになるのではないかと暗い気持ちだったが、避けては通れない事柄なので、奮起して彼を訪ねた。

前回彼に会ってから一年半が経っていた。その時はお互いに突然に悲報に動転していたからか、彼の顔つきも険しかったが、今回は温和な印象でボクを迎えてくれた。

家の中には、家族五人が揃っていた当時の写真や、彼が描いたデッサンや絵画、体力が落ちてからは陶

芸をしていて、その焼き物の作品が所狭しと置いてある。ピカソの模写をしていると、描きかけの油絵が二点あった。陽当たりのいい、過ごしやすそうなアパートだった。

お互いに前回の非礼を詫びて、会わなかった間の話に花を咲かせた。彼は、自分の親や兄弟の墓が近所のお寺にあって、その住職に頼み、お寺のウラに自分の制作スペースを無償で借りて制作活動をしているのだそうだ。そのお札に寺の周りの清掃をしているという。朝、お寺に出かけ、夕方家に戻り、家でも制作している。日々の暮らしの心配がないから、制作三昧の毎日だという。所属している美術家団体の集まりに出かけると、仲間の芸術家から、彼の制作三昧の生活を羨ましいと言われると嬉しそうに話してくれた。

元妻であるキミ子さんも彼に手紙を送っていたらしく、その話にな

った。「こないだキミ子から手紙がきたよ。なんか弱気な手紙だったな。彼女も自分の息子の悲報に気落ちしている、そんなことをハガキに書いて送ってくるんだけど、ハガキはないだろうよ。郵便屋だって人間なんだから、うっかり読んじゃうかもしれないだろう。誰が見てるかわからないんだからな。だから、三〇円余計にかかるけど、そういう内容の手紙は、封筒に入れて送るもんだって返事書いといたよ。ハガキにな」という話に、思わず大笑いしてしまった。相交わらず人間不信はあるようだ、彼は彼の世界で生きているのだなと思つて苦笑してしまった。

午前中のそれも早い時間の訪問で、「朝ご飯を一緒に食べないか」というので、自分で漬けている漬物と焼き魚に炊き立てのゴハンをこちそうになった。その後、長らくそのままになっていた書類に判をもら

って彼のアパートを後にした。

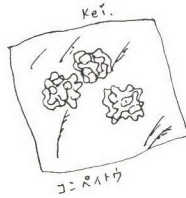
帰り道、車を運転しながら、彼の話の思い返していた。生活保護で支給されるのは、毎月一二万、その中から家賃が五万円、残り七万円が生活費に当てられる。医療費や市バスは無料。多分、税金や保険、年金などの公的な請求は一切ないだろう。それでも彼には一生をかけて追求していくことがあって、それは金銭に代わるものではないからこそ、今の状況を、恵まれた生活をしていると満足していたのだろう。

人には様々生き方がある、その情報が不足しているから、多様な考え方ができずにいて窮屈に感じることも少なくない。しかし彼の生き方を知ること、結構、なんでもありなんだなと思つた。そして、また一つ視野が広がる気して、判を押しした書類よりも大事な何かをもらえたよな、そんな気分になれた。

離婚家庭の子どもの気持ち 2

新川てるえ

NPO法人Wink・理事長
<http://www.npo-wink.org>



「新川てるえさん、私はあなたが世界で一番嫌いです」という一文からはじまる一八歳の女の子からの葉書でした。とても小さな字でびっしりと書かれた文章には、自分の親にぶつけられない気持ちがたくさん書いてありました。

「母子家庭共和国」なんていうサイトを運営して、離婚を肯定しないで欲しい。自分の母親は暴力で離婚して母子家庭になって、そのために自分がどんなに辛い思いをしてきたかという内容でした。「子どもは口に出さないだけ。私は本当は母を絶対に許せません」と書かれていました。

読んでいて、私は自分の娘に言われているような気持ちになりました。きつとこれが離婚家庭の子どものストレートな気持ちなのでしょう。

「子どもの幸せを優先に考えて、子どものために我慢できないのだしたら、子どもを産むべきではない」とも書いてあったけれど、あなたはお母さんにとっても愛されて生まれてきたんだということを忘れないで欲しいなと思いました。

誰もが離婚が子どものためにはいい選択だなんて思っていないと思います。でも、誰もが子どもを幸せにしたいと思っています

そのために、暴力から逃げて頑張ってきたお母さんを否定しないで欲しいと思いました。でも、肯定するにはまず彼女の気持ちをぶつける場所こそが必要だったのでしよう。

一六歳になった娘も、中学生のころには私に対して否定的なことばかり言っていました。そこでこの葉書を娘に読んでもらいました。

ウインク事務局に昨年の秋、一枚の葉書が届きました。

「これ、本当の気持ちだと思うよ。でも、この子は自分の親に言えなくてママに言ってるんだね。私みたいにママに直接言えればいいのにな」というのが感想でした。それから「この葉書を無視しないで感じたことをHPに書いてあげなよ」とアドバイスされました。ママが葉書を読んで、「子どもの気持ちがとてもよくわかったわ」って反省することをお前は期待してるんだよって言われて、思わず苦笑いでした。

娘のアドバイス通りに、感想をHPのダイアリーに書いたら、二通目はとても長い手紙をもらいました。意見を受け止めてもらえて嬉しい気持ちと、自分の辛い気持ちで満たされた内容の手紙でした。匿名で送られてくる手紙に、私はそれ以上は何もしてあげることがも

きずに歯がゆい気持ちがありました。

他にも、中学生の男の子から「お父さんとお母さんが離婚するのは誰に責任があるんですか？」と泣きながら電話があつたり。時折、大人の相談に混ざって、離婚家庭の子どもの気持ちが届くことがあります。

NPO法人Winkは、昨年の秋から2期目に入り、理念を「女性の自立支援」から「子ども達の健全育成と大人世代の責任の全う」に変更しました。悩んでいる子ども達の気持ちをしっかりと受け止めていきたいという気持ちと、養育費問題は、大人同士の離婚時の感情を抜きにして、親としての責任の全うとして提案していきたいとの考えからの見直しです。

養育費は、この春に新しい法律が施行され、将来にわたって給料

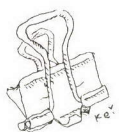
から差し押さえができるようになります。ただし、この制度が相手をお懲らしめるためだけの手段として使われないように、子ども達のためであるという認識を、活動を通して広げていかななくてはならないと思っています。

三月には、『自分でできる強制執行』という新刊が発売されます。この書籍を執筆するにあたり、私は我が子の養育費問題に真剣に取り組み、一五年ぶりに長女の養育費を確保し、親子関係の修復に向けた調停を成立させました。長男の父親とも現在交渉中です。

この貴重な体験を、離婚家庭の子ども達の権利を守るために、将来、上手に生かしていければいいなと思っています。まだまだ先は長いけれど、目標に向かって頑張るつもりです。(完)

妻が変われば夫も変わる「8」

家事労働



三浦 純子

みづら・じゅんこ／会社員

私が脱専業主婦を果たし、アルバイトから有期雇用の仕事を経てフルタイムの仕事に就いた頃、猛ダッシュで走り続けていたのに一息ついてみると……。何だか私ばかりが家事をやって、子どものお迎えにも猛ダッシュで行って、何だかとってもフェアでない状

態であることが見えて来た。

そして、げんちゃんや子どもにそのことを伝えても、「別にやってくれて頼んでないじゃん」とか「何だか一人で被害妄想だよねえ、じゅんちゃん」などと口を揃えて私の方を非難した。

私はどうにか私の家事労働が他の同居人たちよりも多いことを伝えるために、家事チェックリストを作った。保育園の子どもも参加できるように、簡単なことも含め、小さな項目で分けた。1項目50円で、全ての項目をこなすと1日1000円、一ヶ月一人で仕事を全て行くと3万円のお小遣いとなる計算にした。げんちゃんも子どもも大喜びでやり始めた。お皿を洗って50円。洗濯物をたたんで50円、布団を敷いて50円、た

ろが、3日もすると段々と動きが悪くなつて行つた。必然的に私のチェックが多くなつて来たので、子どもに「50円ゲットしなくていいの?」と言うと、「うん、今日はいいや。やつて」と……。そして次の日には「さらに50円払うから、じゅんちゃんやつてよ!」と言うしまつ。結局、私一人のチェックマークが増え続け、げんちゃんも子どももまったく興味を示さなくなるのに数日しかかからなかつた。

その後、げんちゃんが「気づいた人がやればいいじゃん!じゅんちゃん、そんなに肩肘張らずにさあ」と言い出した。すると、げんちゃんは台所にお皿が山ほど溜まつていても気にならない。洗濯物のカゴが2コ、3コと満タンになつていつても気にならない。結局、

気になる私がやる始末。

どうにも納得が行かない。そして、私の不機嫌になるとげんちゃんは得意な料理をして「じゅんちゃん、手料理は美味しいですよ。俺と結婚して良かったでしょ」と言う始末。

その後、TVに出たり、新聞に載ったりしたお陰で、げんちゃんもやらせTV、やらせ新聞になつては申し訳ないと、料理以外の労働にも参加するようになっていきました。

しかし、このところパソコンにハマッテいて、掃除はおろか洗濯もまったくやらない。頭に来た私は手当たり次第に落ちているものを洗濯し、干しながらも、自分のだけ「パンパン」と叩いて皺を伸ばし綺麗に干したりして、げんちゃんのしわくちやのまま干して

いた。心の中で「干してもらえないだけありがたいと思え」と思いつながら。するとある日げんちゃん「携帯電話がないー！ここに脱いでおいたジーパンはー！」と騒ぎだし、シワシワに干してあるジーパンのポケットを見に行くと、そこには携帯電話が……。

パソコンをはじめ携帯などの電子機器には異常な愛着のあるげんちゃんが、プチDV改め、本格的なDVとして爆発するのでは……。と一瞬恐怖に陥りました。があ。

脱、プチDVから、暴力をふるわない男になろう宣言をした（してないか）げんちゃんは、ぐうっと堪え、自分自身が洋服を脱ぎっぱなしにしていること、洗濯物を全てじゅんちゃんに任せていることに思いを馳せたようで、「じゅんちゃんに洗濯物を任せ過ぎてたと思

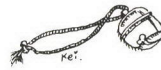
う」と言ったのです。

そして次の日からは、げんちゃんさせつせと洗濯物を洗って、干すようになりました……となれば、めでたし、めでたし、なのですが、相変わらず洗濯物には目もくれません。昨日「また、家事チェックリスト始めようかなあ。どうせやるなら3万もらった方が得だしなあ」と言う、「まー、まー、美味しい物でも食べませんか？」と、また得意分野で逃げようとしている。

どうも、嫌いなことはやりたくないようだ。私だって洗濯好きなのわけじゃないのになあ。冬なんか特に寒いしさー。やつぱり、家事チェックリストのバージョンアップしたやつ作ろうかなあ。月5万くらいゲットできるやつ。ふふっ。

こだわらない、にこだわって

二見れい子



姉と妹、この複雑な関係

亡くなった母の七回忌で、数年ぶりに九州の実家に里帰りしてきた。実家には、もうじき八十になる父と、私より三つ下の妹がいる。ここ十数年、里帰りといえば、私や兄の子どもたちが合流して大騒ぎ、狭いスペースで足の踏み場もない雑居状態の中、大人同士ゆっくり話すことなどままならなかったが、今回は兄も私

も単身の帰郷。それぞれ子どもたちの喧騒や仕事のストレスから解放され、きょうだい三人、母の思い出話でもしながら初冬の夜をゆっくり飲み明かす、そんな光景を夢に思い描いていたのだが……

まず初日の夜、寒空に家族で鍋を囲んだまではよかった。しかし、「これはおいしい」とワインをグラスでぐいぐい飲み始めた兄は、こちらがまだ食事の支度も完全に終わらない内に、気がつけば椅子に座ったままいい気持ちになってコックリ、コックリ。医者という仕事柄、緊張感が切れると、どこでも寝ることができ、得意技があったのは知っていたが、まさかこんなに早くダウンしてしまうとは。その後父もいい気分になって、二人でしばらくその場で船を漕いだ後、隣の父の寝室まで千鳥足。あつという間に高いびきとなつてしまった。残された私と妹は、ほとんど空っぽになった二本ワインのビン

を眺めながら、呆れるやら、拍子抜けするやら。

かくして大いに盛り下がった初日の夜が明けて、まだまだこれからだと期待をかけたのも空しく、今度は我が妹の、私から見れば△超▽マイウェイの性癖に悩まされることになる。車を運転すれば、同乗者がいるなんてすっかり忘れてでもいるような、急発進、急ブレーキ。久しぶりに叔母の家に連れて行ってもらうとすれば迷いまくり、そのくせ事前に父に道を聞いたらどうかという忠告には、「平気、平気、分かっているから!」と、まったく耳を貸さず、とにかく何かにつけて頑固、無神経、不注意、ついでに周りに対する配慮ゼロ!こちらのイライラは募るばかり。一つひとつ上げればきりが無いが、今回滞在したわずか数日間、妹の言葉遣いや立ち居振る舞いが気になってしょうがない。

不思議なもので兄に対しては、前

の晩のように呆れるようなことがあっても「別人格だから」と割り切って流せるのに、妹に対しては、アレコレ注意したくなる。もちろん兄や父の場合と違って、妹とは共通の話題が多い分、親密度も高いし、一緒に過ごす時間も長いから、その分摩擦が増えるのもあたり前かも知れない。でも、もう少し深く考えてみると、実は私の中に、妹に対するコントロール癖が知らず知らずの内にしつかり身につけてしまっているのだ。兄には通用しない自分の影響力が、妹に対しては有効だと信じて疑わないから、彼女が私のコントロールの枠を外れた行動をとるとイライラして腹が立つ。そしてこのパターンとは両極にあつて、矛盾しているように聞こえるかもしれないが、もう一方で、私は妹をとて頼りにしている。どこかで、彼女に構ってもらいたい、いや、姉なんだから構ってもらって当然だ、と思っている。姉と

妹の関係というのは、かくも捻じれているのだ。

思えば、離れて暮らすようになってから二十年、いや三十年近くが経とうとしている。この歳月は、私たちが生まれてから一緒に暮らした年月よりも、ずっとずっと長い。その間にお互いに変化し、新たな人間関係をたくさん築いてきた。それなのに会えばなぜか、同じ屋根の下で暮らしていた子どもの頃の、微妙な力関係を引きずってしまう。

子どもだった頃、両親の留守中に激しい雷雨に見舞われたことがある。たまたま学校から帰って家にいた私と妹は、真ん中の部屋で両耳をふさいでうずくまった。ズ、ガガン、と落雷の音が聞こえるたびに、妹はキヤー、キヤーとすごい悲鳴を上げた。私は、なぜか歯を食いしばって我慢していた。怖かった。妹の悲鳴が聞こえると、もっと怖かった。妹が怖がつている、早く終わってくれ、

と心の中で祈った。雷雨が去って、妹に「ホントに怖かったねえ」と声をかけたら、彼女は「でも、キヤーって大声出したら、けっこうおもしろかったけど」ってあつげらんとしていた。頭に来た。お蔭で、こつちがどれだけ怖い思いをしたかなんて、妹には到底想像できないのだ。

こうして、子どもの頃からずっと、あるときは献身的に「お姉さん」を演じ、あるときは堂々と姉御パワーを駆使しながら、私は姉さん大人になり、彼女は妹大人になった。

千葉に戻る日、再び妹が空港に送ってくれた。心なしか運転が緩やかだった。どんなに腹が立っていても、いざ別れるときには胸がキュンとする。里帰りの後の家族への思いは幾つになつてもちよつと切ない。私も、子どもの頃の思い出に浸るのはほどほどに、そろそろ姉御の殻から脱却するときに来ているのだろう。△完▽

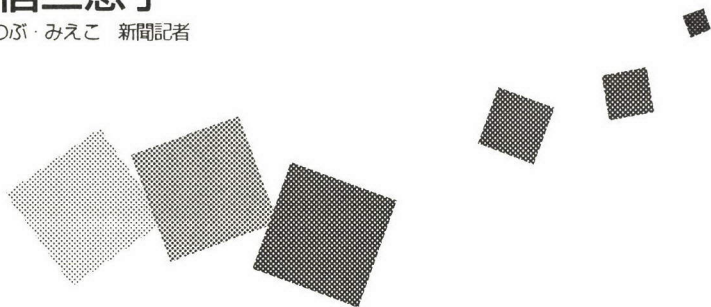
連載

スロークの経済学 (最終回)

効率という名の非効率を乗り越える

竹信三恵子

たけのぶ・みえこ 新聞記者



●普通の人の普通の問題

「スローク」の試みを紹介して一年。読者から多かったのは、「現実離れた普通の人には関係ない試み」という反応だった。

「落ちこぼれた弱者のための特殊な働き方ですかね」と首をかしげた中堅企業の男性経営者は、そんな読者の一人だ。スローにしているのは生産性は上がらず、会社は生き残れないというのが、経営者としての実感だったのだろう。しかし、「周囲に、今の働き方でもう働けない、働きたくもないと言っておりました人はいませんか？」と聞くと、思い当たったような顔をした。「実は息子が……」と言うのである。就職難を突破して、正社員としてある企業に入社したがすぐやめて、今は何もしていない、でもそれは、息子がふがないから、と思っていたという。

だが、難関の正社員試験をくぐり抜ける能力のある健康な若い男性が、すぐやめるような職場に問題はないのか。かなりの潜在力を持つ人材を、それなりの採用コストをかけて入社させ、結局働く意欲を失わせてしまった経営は効率的なのか？ そんな疑問を抱かず、息子の資質のせいにしてしまったのは、実は「不合理でも、死んだ気になっていく根性ある社員

こそが生産的で効率的」という固定した効率観が私たちの前に立ちはだかつているからだ。

スローワークとは、「落ちこぼれた」人たちが遅く、効率悪く、働くことではない。「無理でも何でも早く」といった効率性への固定観念が産んだ非効率を抜け出すための新しい働き方設計なのだ。最終回は、これまで紹介してきた試みから、日本社会を支配する「効率」という名の非効率、「生産性」という名の「非生産性」を乗り越える道を考えてみたい。

●「ありもしない」「能力」を求めない

連載の一回目に紹介したNPO「ニュースタート事務局」の二神能基さんは、スローワークの名づけ親だ。二神さんが注目したのは、引きこもりの青年が持っている「急がない能力」だった。お年寄りが食事するとき、競争社会のペースに合わせて介助するのでは、落ち着いて食べられない。ところが、引きこもりの若者はいくらでも待てる。だから、お年寄りの満足度が高い。重要な能力だが、これを生かす場が今の社会では十分に用意されていない。それは、「能力」の定義が画一化され、マニュアル化されてしまっているからだ。日本経済新聞や経済誌で、最近しばしば経営者が口

にするのは、突出した能力や個性を備えた「異能の人材」の必要、という言葉だ。イメージされているのは、「数カ国語に堪能」とか「ノーベル賞級の技術力」とかいった「能力」のようだ。しかし、そんな人がいたとしても、あなたの会社で何をするの？ そんな人を雇えるだけの賃金を払えるの？ と皮肉のひとつも言いたくなる。

不況で経営は苦しい。だから、苦境を一気に打開してくれそうなカリスマ社員の登場に夢を託す。だが、欠けているのは、たとえば、ゆつくり待てる能力や、言いにくいことでも上司に言える能力など、上司からは忌避されがちだが、組織の維持に必要な小さな「異能」を見つけて生かす経営自体の力だ。

「スローな能力の発見」とは、のろくてぐずなものを珍重しろという意味ではない。人間がそれぞれ持っている一見役に立ちそうに見えない多様な持ち味を最適に組み合わせ、最大効果を発揮する方法の発見ということだ。

この原則は、先月号の「We」で紹介された社会福祉法人「たすけあい ゆい」の濱田静江さんの発想にも表れている。「ゆい」については、数年前に本誌で連載した「家事神話」や、拙著「ワークシエアリング

の実像」(岩波書店、二〇〇二年)でも紹介したので、今回の連載では飛ばした。だが、濱田さんの試みは、働きたいと思う人が、ゆっくりでも早くても、働きたいだけ働いてそれなりに回るように組み上げた組織づくりだ。

働き手のタイプは、理論的には四つに分けられる。すなわち、①長い時間働いてたくさんおカネがほしい②長い時間働いてもそんなにおカネはいらぬ③短時間働いてたくさんおカネがほしい④短時間働き、少しのおカネでいい——だ。これまで生産性が高いと言われてきたのは①のタイプで、専業主婦のいる男性がこれにあてはまる。子育てといったもうひとつの仕事がある女性の働き手は、残り三つのタイプにも分布している。これらを組み合わせ、介護の最適シフトを組むという仕組みがそれだ。そのために、濱田さんは働き手との綿密な面談を行う。極めてスローなやり方だが、組織としては非常に効率が高く、この十年で、スタッフ三百人、事業高四億一千万円の規模に膨らんだ。

全国に知られるようになった北海道・浦河の「べてるの家」も、統合失調症で長時間働けない人々が、働ける時間だけ働き、これらを組み合わせ生活を持しようとした試みだ。「非現実的」どころか、それな

しでは働けない多数の人々にとっては極めて現実的なぎりぎりの選択なのだ。

●グローバル化で激変する社会

これらの発想は「普通の人」のために必要となりつつある。理由は簡単だ。これからは濱田さんの四つのモデルのうち、①以外の人が急増する可能性があるからだ。背景にあるのがグローバル化だ。

九〇年代始めに冷戦が終わり、旧社会主義国も市場経済に参加してきたことで、国際競争は激化している。情報や運輸手段の発達で、企業の移動は格段に自由になり、より安い労働力を求めて国外にも軽々と移動していく。そのため、「普通の技能」の人々の賃金水準は切り下げられ、一部のノウハウや情報を独占している人々に富は集中しつつある。「すぐに戦力になる人材」や「異能の人材」だけに目を向け、残りの人々には、失業か、極端な低賃金労働かといった方向は、すでに日本社会の中にも起きている。職業経験のない若者の失業やフリーター化は、そのひとつの現れだ。

こうした条件の下では、好むと好まざるとにかかわらず、家族全員分の賃金を男性一人が稼ぎ出す仕組みをすべての世帯に保障するための条件は崩れていく。

日本も欧米と同様に、各人が、自分の生活費をまかなう賃金水準へと向かいつつある。こうした働く場を作り出せなければ、「異能でない人々」は、生活保護などの公的支援システムに頼るしかない。そんな社会では、仕事のある「異能の人々」は、そうでない人への連帯感も共感も持てない。公的支援システムに資金を出しながら働かざるを得ない「異能でない人々」は生存の場を失う。

「異能でない人々」が人間性を尊重されつつ働け、社会参加を果たし、多少の税金を払い、公的な発言権を確保できる場を意識的につくっていかなければ、税の配分までも「異能に分類された忙しい人たち」の独壇場になってしまう。

●生産性という名の非生産性

「異能人」しか使えない経営は、社会全体でいえば非効率だ。スローな能力も含めて多様な人々の能力を生かせるシステムは、実は効率的だ。こうした新しいスローな効率性に加えて重要なのは、生産性の考え方の転換だ。

経済学では、生産性とは「労働者一人あたりの一時間あたりの生産量や付加価値」といわれる。工場での

生産量は、長く働いてたくさんつくった人に軍配が上がる。だが、たとえば、だれも買いたがらない商品を扱っている営業マンの場合、どんなに身を粉にして駆け回り、サービス残業をしても、モノは売れない。だから、いくら働いても生産性はまったく上がらないことになる。

サービスや情報を扱う産業の比率が増えている今、生産性は、「働かないから上がらない」のではなく、「いりもしないものを売りこもうとするから上がらない」という場合が多い。「根性がないから売れない」と尻をたたくことだけで生産性をあげようとする古い生産性から、いらぬものは売らないという新しい生産性に向かうのが、スローの要件だ。

雑穀料理のレストランを考案した大谷ゆみこさんの例がそれだ。世の中をじっと観察していたら、本当は必要ないモノをパッケージやPRで飾り立てて売り込もうとしていることに気づいた。方針転換を変え、近未来に人間が必要とするモノという枠組みで考えたら、それは身体が必要とする雑穀料理だった。

雑穀食はひまなグルメのすること、という思いこみを覆し、お金を稼げて時間のない人には、お金を出せば手軽に食べられる雑穀レストランを、お金はないが

時間のある人には、簡単な雑穀料理の調理教室を開いた。お金がなくて長時間労働を強いられる人のための提案がないことが欠陥のようだが、これについては雑穀レストランを自力で起こす転職の道を用意することに対応するという。

女性のためのセックスグッズを販売している北原みのりさんの場合も、女性は性欲がないという既成の観念を抜けだし、必要なものを売ってみた、という点が共通している。発想が独自だと、競争の少ない市場が創り出せる。その結果、無駄な競争を省け、分スローな働き方に近づけることができる。

必要がないモノを押し売りする商法は、スローな働き方を阻む。人々に必要な情報を提供するミニテレビ放送局「Our Planet」を立ち上げた白石さんも、その一人だ。大手のテレビ局は、デジタル化への投資のため、人件費や制作費を圧縮している。安い制作費で手間をかけずにつくった安手の番組で視聴率を稼ぐため、どぎつい刺激や一過性の人気タレントの出演で味付けする。そんな中で安い細切れ仕事の不安定な働き手ばかりが増え、この人々は技術がありながら意欲をそがれてやめていく。その発表の場をつくるうというのが白石構想だ。

ここでの問題は、お金にするノウハウが確立されていないということだ。スローワークの多くが、利益の壁につきあたる。構造を変えないで利益を極大化するには、人件費の抑制が手取り早い。人減らしと、そこから来る長時間労働で、スローとはほど遠い働き方が増えていく。だが、貨幣経済の社会に生きている限り、貨幣を稼ぐ方法を開発していかなければ生活さえできない。

この解決について、スローワークの試みは、二つの方法を示している。

●既存の貨幣への依存度を減らす

ひとつは、既成の企業と提携することで、働き手のスローな力を引き出さなければ成り立たないような事業の委託を受け、貨幣を獲得することだ。スローな力を生かす労務管理が失われてしまっている大手企業が、高齢者事業や緑化事業など「待ち」の必要な事業に展開する場合には有効な方法だ。

その代表例である「ニュースタート事務局」は、現在、ワンルームマンション会社と提携し、高齢者向けマンションの青年たちへの委託管理の仕事の一部請負へ乗り出すなど、一般企業との提携を広げている。

二つ目が、貨幣への依存度を減らす試みだ。

ニュースタート事務局は、地域のお年寄りの食事サービスを無償で担当してくれる人に無料で住居を提供するといった貨幣を通さない交換を増やしている。

「赤かぶ」は、無添加食品の弁当を売って、地域から一定の貨幣を獲得する。ただ、貨幣だけで参加者の生活をすべてまかなおうとすれば、働く時間や規模を拡大せざるをえない。長時間労働と大規模化の道だ。これを軽くするため、地域の人々のさまざまな相談事へのなどの無償サービスと引き替えに、弁当の材料を安くつくってもらうなど、互いの労働を直接交換することで、貨幣で取り引きする部分を減らす工夫がそこにある。不況で、生活を貨幣だけでまかなえない人が増えた現状を逆手にとった形だ。

デンマークの社会学者エレン・ブランは、隣家の屋根を修理する代わりに隣家の人に壁を塗ってもらう、といった労働交換の試みについて、「賃金を稼いでも、為替変動で目減りしてしまう。貨幣を通じないサービスの直接交換はリスク回避の役割を持っている」とも述べている。貨幣経済に背を向けるのではなく、お金だけを稼ぐ時間を減らし、増えた生活時間の中で直接的な労働交換を増やしていく折衷型貨幣経済の流れ、と

いうのだ。

「べてるの家」の場合は、地場産業のコンブの袋詰めや販売など、フルタイムの仕事が必要な人々では採算がとれない仕事を、細切れで請け負うことで貨幣を獲得しているが、障害者への公的補助で補ってもある。

「仕事の高度化についていけない人は残せない」という企業の姿勢によって、仕事に参加できる余地は狭められつつある。にもかかわらずスローなワークが開発されなければ、公的補助の必要性は増え続け、会社に残ってこれを負担する人と、残れずに補助を受ける人との溝は深まる。その歯止めのためにも、スローな働き場の開発は不可欠だ。

男性も女性も、障害のある人も、自力である程度の貨幣をかき集め、足りない部分は労働交換か、フルで稼げる人が拠出する公的補助で足していく。労働時間短縮によるプチ労働と、増えた生活時間を利用してのプチボランティア、さらにプチ生活保護の組み合わせが新しい安定を確保する。そのための拠点がスローワークなのだ。

『子宮・卵巣がんと告げられたとき』

まつばら けい、大島寿美子著

岩波アクティブ新書

七四〇円＋税 二〇〇三年十二月刊

まつばら けい

（フリーライター、「子宮・卵巣がんのサポートグループあいあい」主宰）

「患者が医者のパターナリズムに対抗するのはむずかしい。というのも医者は知識と経験を積んだキャリアだが、患者はだれでも自分の人生で病気を初体験している初心者だからである。しかも患者は互いに孤立し、他の患者の情報を知らない」

女性運動の上野千鶴子さんと、

障害者運動の中西正司さん、それぞれの担い手がコラボレーションでまとめた『当事者主権』（岩波新書）からの引用である。

まったくもってむずかしいと、私自身の経験を振り返っても、強く思う。

患者と医師の間に横たわる、知識量の絶対的格差。

しかも、命に関わる進行性の病気。急がねばと心は焦る。

だが、「がんの疑い」「がん」と告げられたとき、本人やその家族は、しばしば精神的ダメージの直撃を受ける。普段だったらできる行動や判断も、ショックを受けているときには、難しい。

そして、婦人科がんの情報は少ない。とりわけ、近年増加している卵巣がん、子宮体がんについての一般書は、ごくわずか。

医師はたいがい男・患者は女。

生殖器のがんというタブー意識もある。それゆえ、医師に質問しづらい。悪条件が揃っている。

おぼろげに、どうも治療法によって、予後の経過や、後遺症の出方がだいぶ違うらしいと思いつつても、いざ具体的に治療法を自己選択しようとしたら、一体どうやって!? どこから手を付けたらいいのか、暗中模索がはじまるのが常だ。

そんな混乱の極みに SOS してきた患者・家族の人たちからの電話相談に応じること、3年半。自分のがん体験から、はや4年。婦人科がん医療という、（未知なる土地）に迷いこんでしまった旅人たちに、地図となる本を、という願いを形にしたのが本書である。

いざというとき、あなたやあなたの大切なひとが悔いのない選択ができるように。立ち遅れている

女性医療改革やセルフヘルプ活動の文脈で読んでいただいても、興味深い内容ではないかと思う。

その誕生のきっかけは、朝日新聞社論説委員の川名紀美さんが「窓」というコラム記事に「子宮・卵巣がんのサポートグループあいあい」（以下「あいあい」と略す）を取り上げてくれ、それを目にした岩波書店アクティブ新書編集部

の太田順子さんが、執筆依頼してきてくれたことだった。

婦人科がんの患者・体験者、それを支える家族や友人たちに役立つ、エンパワメントできる本を！

そのために、海外・国内の関連の医療情報から、科学的根拠に基づいて重要性の高いものを、わかりやすく整理して紹介する必要がある。

その役を担ってくれたのが、共著者の科学ジャーナリスト、大島

寿美子さん。彼女は、元共同通信科学部、元ジャパン・タイムズ記者、現在は札幌にある北星学園大学文学部専任講師をつとめる。「女性と医療」に大きな関心を持っている。

自分がもし方が一、婦人科がんになったら、どんな情報が欲しいかという問題意識で、玉石混交の情報の山から、ぜひ知っておきたい信頼できるものを厳選し、かつ公平に紹介している。

特に婦人科がん医療の問題点は、どんなところだろうか？

「あいあい」がNHK・ETV2 001に協力して行った「がん患者に学ぶアンケート」（2001年5月、回答571人）によると、婦人科がん医療に満足している人は6・7%と、残念ながら極めて少ない。

婦人科がんの患者の約8割は、

治療法の選択肢を提示されていない。また、患者の中には、自分がどのような検査を何のために受けたのか知らなかったり、理解できていなかった人が少なくない。婦人科がんの患者の約4割は、後遺症・副作用について十分な説明を受けていない。

そして、日本では、科学的根拠に基づく標準治療が普及していない。例えば、子宮頸がんIb～IIa期は、手術療法と放射線療法を比べて、治療成績は変わらない。そのため、世界的には放射線療法も標準治療となっている。だが、日本では放射線治療を行う医療機関は少なく、広汎子宮全摘出術という手術療法が主流。この手術はリンパ節も広範囲に切除するため、患者のほとんどに排尿障害が起る。リンパ浮腫などの合併症や後遺症も増える。

また、治療の合併症・後遺症を含め、退院後のくらしの情報やケア、サポートが不足しているという問題もある。

質問例 「検査を受けるにあたって知っておきたいこと」

- これからする検査の名前は？
- なぜこの検査が必要なのか？
- 検査中に苦痛を感じる可能性はあるのか？
- 検査には副作用や合併症があるのか？
- 苦痛を予防したり軽くしたりする方法は？
- 検査時間にはどのくらいかかるのか？
- 検査の結果とんなことがわかるか？
- 診断するのは誰か？
- 結果はいつどのよつな形で知ることができるか？

(大島寿美子さん作成・本書より転載)

これらを踏まえ、本書で心がけたことは、次のようなことだ。

・患者の自己選択、自己決定を支える。

・病院で行われる検査の方法や意味がわかる。

・自分に合った治療を選ぶ基準となる標準療法がわかる。

・自分にとって必要な情報の探し方がわかる。

・医師とのコミュニケーションをよりよくする助けに。

・リンパ浮腫や排尿障害など合併症・後遺症への対応、〈幸せな性〉を探すためのアドバイスなどを、

きめ細かく具体的に紹介。

・巻末には、様々な情報源（治療法の選択や後遺症に関してなど）や、社会資源（リンパ浮腫に対応する医療・治療機関）、「性の相談ができる機関」、患者会など）

の役立つリストを掲載。

の役立つリストを掲載。

そんなわけで、読者からのこれまで寄せられた評判は「検査の説明に、それに伴う可能性のある痛みや出血、痛みをやらわらげる方法もあって、すごく親切！」（質問例）が豊富で具体的に、すぐ使える「目先のことでだけでなく、先々の治療後の暮らしまでわかる」「後遺症も詳しくふれていて、画期的」など。

作り手たちの地図となる本を々という目標は、どうやら達成できたようだ。あとは、必要とする人々に、この本の存在を知ってもらう、読んでもらうこと。

がん体験の先輩のひとりとしては、「病気はある日天災のように降ってくる。病気になる前から読んで、予備知識を持つておく心安心だよ」と力説したい。

読者のひろば

東京 高橋りりす

We 12月号を読んで感じたこと。

まず、「暴力のない世界をめざして」の中で気になることがありました。それは、被害者が支援者になる危うさについて語られている部分です。対談の中で牧下さんや稲邑さんが言われていること自体はもともと私も思うのです。確かに「被害から回復していなくて、自分をまだ客観視できていない状態の人が支援者になることの危うさ」もあると思うし、「きちんと自分の問題をクリアーしてからでないと支援者になってはいけない」というのもよくわかります。

今まで被害者を蔑ろにして被害者支援運動が進められてきたことへの反動からか、「被害者のいうことはすべて正しい」とばかりに、被害者を腫れ物に触るようになつたり、祭り上げたりするのも問題だと思えます。しかし、私が引っかかるのは、支援者になるのに不適切な被害者のことが語られていて、支援者になるのに不適切な、専門家を含むサバイバ

ー以外の人たちについては言及されていないことです。

実際は、自分を客観視できていない状態の、自分の問題をクリアーしていない、いわゆるサバイバーでない支援者は、ゴマンといます。むしろ自分の問題をクリアーしていないからこそ支援者になろうとする人も多いです。

私は稲邑さんを個人的に知っているので、稲邑さんが専門家の中に支援活動をするのに不適切な人がかなりの割合で含まれていることを知っていることはわかっています。しかし、女性への暴力に対するこれまでの取り組みの中で、支援者になるのに不適切な被害者について（すべての被害者は支援者になるのに不適切であるという議論も含めて）語られるのは何度も聞きました。支援者になるのに不適切な専門家（フェミ系の）について語られるのは（サバイバー同士の愚痴を除いて）一度も聞いたことがありません。

「支援活動をするのに不適切な被害者はいるかもしれないが不適切な被

専門家はいない」という前提の下に運動が進められているように思えます。

ですから、たとえ、牧下さんと稲邑さんがそのような前提の下に対談をしているのでなくとも、支援活動をするのに不適切な被害者についてのみ言及され、支援活動をするのに不適切な専門家についての言及がないという事実そのものが、被害者に対する偏見と専門家に対する不適切な信頼を助長し、ひいては被害者支援に携わるのに不適切な専門家が、サバイバーを支援者になつてもいい人となつてはいけなない人を選別する可能性に導くのではないかという危惧を抱いたのでした。

もうひとつは、「読者のひろば」での沼崎一郎さんと三浦敏さんの応酬。沼崎さんの文章は、説得力があり、正論で、胸のすく思いがしました。それに対して三浦さんの文章は、理論的に弱い、反論のポイントがはっきりしないと感じました。また、「沼崎さんのような表現をされると、新しく女性問題やDVに興味を持ち、

読者のひろば

こういう中に入ろうとしても、どうしても入りにくくなるのではないかと思うのです」と、「伝え方のまずさ」に攻撃の鋒先を向けるにいたっては、「だから、それが『甘え』なんだよ!」とさえ思ってしまった。

しかし、このように内容だけに注目すると、確かに沼崎さんの方に分があると思うのですが、私としては別のところに目が向いてしまいます。それは、沼崎さんが社会的地位の高い大学助教授であり、理論構築をしたり文章を書いたりすることを職業としている人であり、自分の意見を公に発表できる機会の多い人であるということです。

もし、このふたりの立場が逆だったらどうかかと考えてしまうのです。もし、善意の進歩的な男性知識人がDVについて文章を書き、その中で自分自身のDVを「矮小化」したとしたら（たいていのそうといった知識人は自分自身のDVについてそもそも書いたりしないと思うけど）、どうでしょう。たいていの一般人は、そういう「矮小化」を指摘する機

会を持ちません。

そんな中で、一般人がどうにか発言の機会を得、知識人の発言内容を理路整然と批判したとしても、三浦さんがしたように、知識人がそれに対する反応（受容であれ、反論であれ、弁明であれ）を正面切って返してくることはまずありません。

私の経験によれば、良くて無視、悪ければ権力を笠に着た裏での圧力です。社会的地位のある人が一般人を批判するのにリスクを負わないが、一般人が社会的地位のある人を批判するのはリスクを負うのです。そういう力関係の不均衡を考えると、内容的には沼崎さんに同感するものの、「沼崎万歳!」にはなりません。

※ ※ ※

東京 木村民子

イヴェット・ルーディさんという女性をご存じですか。フランスにおける女性政治家の師と仰がれ、女性の権利省元大臣として活躍された素

敵な方だ。

豊中市の男女共同参画推進センターすてっぷの館長をつとめる三井マリ子さんから、ある日、「木村さん、イヴェットさんが日本に講演に来てくれるって。これはすごいことなよ」と聞いたとき、三井さんの興奮が即座に伝染してしまった。

三井さんは昨夏、イヴェットさんの自宅を訪ね、「フェミニズムの現在」という著書に感動したことを伝えた。そして、彼女がパリテ（男女同数原則）の憲法改正にどのような影響力を与えたかを話してもらったという。日本に帰国後も、粘り強い招聘交渉により、ようやくイヴェットさんの承諾を得、来日が決まった。

女性議員を増やす活動を十年以上も続けている、全国フェミニスト議員連盟が主催しないでどこがやるのと三井さんにたきつけられれば、ここは、ひととはだ脱こうじゃありませんか。早速会場探しから始めたが、なんと幸運なことに私の地元文京区のシビック小ホールのお話が確保できました。ジェンダーフリーや男女共同

読者のひろば

参画へのバックラッシュがなりふりかまわず吹き荒れている日本で、今、イヴェットさんのお話を聞けば、女性たちはきっと元気になるだろう。バッシングに立ち向かう勇気を奮い起こすにちがいない。どうぞ、読者の皆様も口コミで輪を広げ、お誘い合わせの上ぜひご来場ください。

※

フランス初の女性の権利大臣を迎えてフランスの女性と政治

クオータからパリテへ

講師：イヴェット・ルーディ（フランス女性の権利省元大臣）

日時：二〇〇四年三月一五日（月）午後七時～九時

場所：文京シビックホール・小ホール

参加費：一般千五百円、学生千円

協力：赤松良子、樋口恵子

主催：全国フェミニスト議員連盟

後援：よなか男女共同参画推進センターすてっぷ、WINWIN、女性連帯基金、高齢社会をよくする女性の会

※

男女共同参画社会実現の第一歩は女性のエンパワーメント。女性の政

治参画が何よりも求められます。

しかし、日本は衆議院の女性議員率七・三％で世界一八・一カ国中一三〇位。一方、フランスは、一九九九年、憲法を改正し、議会職への男女の均等なアクセスを促進するという条項を盛り込みました。パリテといえます。そのパリテ導入の火付け役イヴェット・ルーディさんからフランス政治における男女平等についてのお話をお聞きし、日本女性へのヒントと元気をいただきます。

なお、講演会は大坂・豊中市（3/13）、福岡市（3/14）、東京・文京区（3/15）、長野・下諏訪町（3/16）、愛媛・宇和島市（3/18）、愛媛・松山市（3/19）の六カ所を予定。

※

イヴェット・ルーディは一九二九年生まれ。ジャーナリスト。フランス女性政治家の師と仰がれている缶詰工場社員から大臣へ。国会議員、欧州議会議員、市長などを歴任し、一貫して女性の解放をめざす。大臣就任時、妊娠中絶費用の健保適用法、公職への雇用機会均等法、男女職業

平等法などの「女性六法」を成立させた。クオータ制導入をめざしてやむことなく闘い、その運動が「男女同数の議員候補者」（パリテ）を義務づける憲法改正として結実した。

哲学者シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、イヴェット・ルーディをこう評している。「ものごとがあるべき姿にない場合、それはなぜかと問いかけて、たたかい、あるべき姿に変えていった女性」。著書に、『Cause d'Elle, 1985（日本語訳『フェミニズムの現在』、朝日新聞社、1986）、ベティ・フリーダ著『The Feminine Mystique（日本語訳『新しい女性の創造』、大和書房）の仏訳（1984）等多数。

★申込み・連絡先

木村民子（全国フェミニスト議員連盟代表） TEL/FAX03-3823-4365

TEL/FAX03-3816-2629（文京区議会市民フォーラム議員控へ室）

MaiIupinus3@mbinfweb.ne.jp

三井マリ子（同世話人国際部担当）

MaiIupinus3@mbinfweb.ne.jp

Mail bekokuna@hotmail.com

●一年間Weeをご購読いただきありがとうございます。二〇〇四年度(四月号)の継続のお願いを挟み込みました。早々に継続のお手続きを下された方も、お早めに郵便局で振込手続きしていただけると幸いです。何卒よろしくお願ひいたします。(編集部)

●楠原さんの著書「セカイをよこせー子ども・若者とともに」で忘れられないのは、「動物でも風や光や精霊からでもない、「生きていいんだよ」という声やまなざしや目に見えない何かによつて励まされないと人は自分の力に気づいてたくましく生きていけない」というフレーズ。ひとりとか核家族とか、狭い単位の中で問題を解決しようとするから「君は君のままでもいい」にならない。ニュースタートの雑居福祉社のように我が子の子育てはうまくいかなくても他人の子の子育てと育児交換することやうまくいくとか、フェミックスのように超わがまま欠陥商品同士であっても何人かでプチ異能の補完関係をかけあわせれば怖いものなしと

か(おまけにそれぞれのネットワークがあるから可能性はさらに広がる)、単位を大きくして安全ネットをつくれれば、たいていの(問題)は消えてしまつて、「君は君のままでもいい」になるだろう。

この年になると、つくづく思うのはパランス、「好い加減」が大事ということ。自立とか自己決定とか、能動が全ての近代的な価値観に従うと、自分の好みに従うので世界がどんどん狭くなり閉じていく。ときには否応もなく巻き込まれるのもありでないと世界は広がらないだろう。竹信さんの「スローワーク」の見事な分析のなかに、「スローな能力の発見」とは「一見役に立ちそうに見えない多様な持ち味を最適に組み合わせ、最大効果を発揮する方法の発見」とあつて、「お私たちのことじゃん」と嬉しくなつた。

話しかわるが、去年の夏をすぎてから気功の講座に行くたびに「骨盤が広がつて、ゆるんできましたね」と言われる。十年周期でくるエネルギー下降期が始まつたらしい。頭が働かないのに仕事は降つてくる一方で去年はしんどかつた。あと一年、私はぼーっとしてスローな能力の発見を考えよう。ジェンダーに敏感な

学習を考える会と港区男女共同参画センター共催の連続講座があります。二月七日は竹信三恵子さん、八日は青山栄子さん(連合東京何でも相談員)、二一日は当事者によるパネルディスカッション、いずれも午後一時半〜三時半、会場・申込は同センター(03-5561110)(稲島)

●楠原さんのお話はいろいろと考えさせられた。深夜に娘さんに付き合つた公園での話(子どもたちがなぜそうなるかより、「では、どうするか」が大事つてホントそう思う)、学生さんのフィールドワークやスタディツアーの話、特に人と人との間に何を介在させるかということへの言及は印象的だった。そして「自分の悲しみを中心に世界は動いていないんだ」ということを知らしめてくれるものがしたたかに介在するというあたり…巷では「世界の中心で愛を叫ぶ」という本がベストセラーとかで、本を読まない娘までが買って「泣けるよ」と言う。友だちが待つてから早く読めというので、まあおつきあひするかと読んでみて、呆れた、というより怒りが。「この子たち、なんで友だち一人もいないの」なんて二人だけの世界に閉じこもつて

の「恋愛だけが人生じゃないだろ」(せこいので、お金の無駄や」と呼びそうだったが、娘を前にがまんした)。沼崎さんというところの女子大生だけの話でなく、すでに恋愛至上主義にどっぷりの中学生(「P」)というマンガも貸してくれるがこれもひどい)。ここから自立的に育っていくのはたいへんそうだ。娘の推薦により本を読んだ近所の友だちの息子は「おかあさん、絶対怒るから、読まないほうがいいと思うよ」とコメントしたそうだ。おー、いい男になるかも。どうせなら、同じ中学2年生が主人公の石田衣良の『「Cat」』でも読んでくれよと思つてすすめたが、まあ読まない(字が多すぎだつて…笑。「いろんな人との出会いが面白いよ、だから自分が生きることを楽しんでよ」と言つてるだけでは説得力もないので、私自身が楽しんで生きてるところ見せなきゃね。(中村)

●恋愛至上主義も困つただけけれど、恋愛どうでもいい主義もちよつと寂しいものがある。とは言いながら、昔からただの恋愛映画は、フーン!だった。そりゃ、不治の病で死んだりすれば泣けたりはするけど、泣かされたことが悔しかったり

した。一応どんなものか付き合いで観に行つたが、今ははなから観もしない。私は映画や小説から、はたまた近所のゴシップから、勿論長じては実体験から、恋愛とは何か、自分にとって理想の恋愛、結婚とはどういうものかいいのかを一所懸命考えた。今はそれを大学の講義の中で学ぶなんて、なんて贅沢、もつたいない。もつたいなさには二つの意味があるんだけど……。(河村)

●沼崎さんの「恋愛中毒症」に罹つたときの解毒剤4ヶ条(自分だけの時間を持つ、自分だけの友だちを持つ、自分だけの興味を持つ、自分だけの仕事を持つ)を実践したら、もう男も恋愛もいらなくなつてしまった。周りの艶っぽい話を傍らで聞いているだけで十分。関わりなければDVにもあわなないし、女の下支えで男をやつていられる上げ底男に幻想を持つより、今となつては自分のささやかな生活のディテールを楽しむ方が大事。若い頃に沼崎さんのメッセージが欲しかったとは思ふけれど、いろいろと体験学習してきたからこそ言えるのかもしれない。頭で分かることと、からだで納得することは違うから、体験を通して学び通

くらしと教育をつなぐWe

2004年2/3月号 (120号/vol.12 No.10)

2004年2月1日発行

定価……680円(本体価格648円+税)
(年間購読料7500円、送料共)
発行……femix・フェミックス
〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703
tel & fax 03-3424-3603
E-mail: femix@mail2.alpha-net.ne.jp
http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/
みずほ銀行 池尻大橋出張所(普) 1501277
郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス
編集……稲邑恭子・中村泰子
装幀……川口民子 イラスト……中村 桂
印刷……(有)イー・エム・ピー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

過させるといふのもありのようないふ気がある。幻想にはまってみるのも若い人には必要なプロセスかも。失敗してみるのも当然ありだから、失敗したときに「それもあり」と認めてくれる関係や支えがあれば、若者の体験をもっと豊かにできるかもしれない。さて、四月からアサートイブトレーニング(AT)講座(毎週火曜日午後六時三〇分〜二時間、全十二回)をします。会場はフェミックス。詳細はお問い合わせ下さい。(大沼)

購読ご希望の方は、編集部にご直接お申し込み下さい。電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で〇号から購読希望と明記して年間購読料7500円をお振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、女と男が対等に生きることができる社会の実現のために必要な、さまざまなテーマを取り上げ、特に教育現場において性教育やいじめ防止教育なども包括した「ジェンダーフリー教育」の実現と、「男女共同参画社会」実現のための具体的なノウハウを追求します。

■2003年度特集

4月号 ジェンダーフリーを阻む男の病/5月号 みんなのフェミニズム/6月号 スキルズ・フォア・ライフ—生きる力/7月号 元気になる性教育/8/9月号 (115号)《公平》な制度を考える—年金・DV/10月号 子どもが元気になる場所 /11月号 暴力を終わらせるために /12月号 DV被害者支援と当事者のエンパワメント /2004年1月号 働く場をつくる

■連載

スローワークの経済学 竹信三恵子◇女が歳をとるといふこと 木村栄◇わがまま映評 満田康子◇英語で女性問題を語るためのワンポイント・レッスン 吉原令子◇乱読大魔王日記 冠野文◇過去を振り返らない/先を考えない 松本一郎◇日本のNPOを目指して 新川てるえ◇妻が変われば夫も変わる 三浦巖・純子◇こだわらない、にこだわって 二見れい子

■女と男の家庭科新時代

授業実践/風がかわる匂いかわる◇新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎◇曲がり角の家庭科 梶原公子◇カトーさんの授業スケッチ 加藤昭仁◇食の歳時記 入江一恵・坂本 薫◇“覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」沼崎一郎

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーのリストをご希望の方はお問い合わせください。

■2002年度特集

4月号 家族をひらく/5月号 ジェンダーと人権/6月号 力の再定義/7月号 ワークシェアリングの可能性を探る/8・9月号 からだが一番!ワーク&ヘルスのバランス/10月号 女性への暴力—被害者支援とシスターフッド/11月号 生き延びるための知恵—お金と労働/12月号 ジェンダーと婦人科医療/2003年1月号 ジェンダーと教育/2/3月号 ドメスティック・バイオレンス

■Weの置いてある書店■

東 京 ●表参道—クレヨンハウス

●東京ウィメンズプラザ内—パッチワーク

●新宿2丁目—模索舎

●西荻窪—ナワ・ブラサード

大 阪 ●ウィメンズブックストアゆゆう

(書店でご注文の場合は「地方小出版流通センター取扱い」としてお申し込み下さい。)

くらしと教育をつなぐWe 読者募集

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイグランドハイツ703

<http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/>

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp